

アメリカ合衆国スミソニアン研究所-アメリカ民族学局紀要-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学図書館 公開日: 2013-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 憲一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16009

アメリカ合衆国スミソニアン研究所 アメリカ民族学局紀要

佐々木 憲一*

はじめに

アメリカ合衆国スミソニアン研究所 Smithsonian Institution アメリカ民族学局紀要 Bureau of American Ethnology Bulletin 第1号（1887年刊行）から1967年刊行の最終号である第200号まで（P469/17//D）が、2001年度の文学部研究用基礎資料として、一括して明治大学中央図書館に入った。対象地域が南北アメリカ大陸に基本的に限られるものの、『図書の譜』8号で紹介した「ハーヴァード大学付属ピーボディ人類学博物館研究報告」と同様、民族学、形質人類学、考古学、言語学も含めたアメリカ合衆国総合人類学の幅広い研究成果がこのシリーズに収められている。特に、スミソニアン研究所はアメリカ合衆国の国立研究機関であって、1960年代までの豊かな予算を反映し、この広い分野の最高水準の成果が反映されている。さらに、本稿第19章で解説・紹介するように、人類学の分野で画期となる研究を成し遂げた指導的役割を担う研究者たちが多数執筆にあたっていることは、特筆すべきであろう。

スミソニアン研究所は1846年に、そしてその両腕としてアメリカ民族学局と国立博物館 National Museum（現在の国立自然史博物館）が1879年に所内に設立された。これら機関は19世紀後半、アメリカ合衆国人類学が単なる好奇心の対象から確固たる学問分野に脱皮するのに、限りなく大きな役割を果たした。

スミソニアン研究所はこのアメリカ民族学局紀要 Bulletin の他に、様々

*ささき・けんいち／明治大学文学部准教授／考古学

なシリーズの刊行物がある。本学中央図書館で揃っているのは、アメリカ民族学局年報 Annual Report シリーズ (P389/15//D) 全48巻で、このシリーズには500ページ程度かそれ以上の長大な研究報告が収められている。以下の解説で述べるように、一部の紀要と年報の内容は相互補完的であるが、年報の内容紹介は後日に期したい。そのほか、Smithsonian Miscellaneous Collections があり、人類学の研究成果が多数公表されている。

今回紹介する Bulletin は、英語圏の人類学界におけるモノグラフ monograph と分類される出版物である。「論文以上、単行本未満」の長さの原稿を活字化する媒体としてはもちろんのこと、商業出版物としては扱えないような、研究成果が複数冊に及ぶ長大な原稿の受け皿としても、このシリーズは機能してきた。大半の号が実際、論文以上、単行本未満のボリュームであるが、『百科全書 Handbook』と題された号は単一の号を名乗るのに、複数冊から成り立っている。百科全書とは、対象地域の文化や言語に関する総合的研究の成果である。顕著な例として、紀要第143号、全7巻構成の『南アメリカ大陸先住民族百科全書 Handbook of South American Indians』をあげることができる。ほかにこのシリーズの一部をなす百科全書として、30号『メキシコ以北アメリカ先住民族百科全書 Handbook of American Indians north of Mexico』(1910)総2193頁、40号『アメリカ先住民族諸語百科全書 Handbook of American Indian languages』(1911)総1972頁、78号『カリフォルニア先住民族百科全書 Handbook of the Indians of California』(1925)総995頁、がある。30号と78号は刊行の数十年後に復刻版が商業出版物として出されており、現代的価値が高いことがわかる。余談ながら、このシリーズが先鞭をつけた百科全書刊行の伝統は、1964年から1976年に亘って University of Texas Press が国庫補助事業として刊行した『中央アメリカ先住民族百科全書 Handbook of Middle American Indians』(全16巻、1980年代に補遺編が4巻)と、1978年以来現在も Smithsonian Institution Press により刊行が続いている『北アメリカ大陸先住民族百科全書 Handbook of North American Indians』(全20巻)として、現代のアメリカ人類学界に継承されている。

こういった長大な原稿とは逆に、紀要第119,123,128,133,136,151,159,164,173,186,191,196号は『人類学研究論集 Anthropological

Papers』と題され、相互に関連しない複数の論文を一書にまとめている。また小シリーズとして、『河川流域低地における（ダム建設に先立つ）行政発掘調査の成果集 *Inter-Agency Archeological Salvage Program, River Basin Surveys Papers*』があり、紀要第154, 158, 169, 176, 179, 182, 185, 189号が該当する。

80年間に亘って刊行されたシリーズだけに、出版の方針も若干変わったようで、シリーズ開始間もない19世紀には、30ページくらいの研究成果を単行本として出していたのに、1938年に『人類学研究論集』の刊行が始まると、70ページくらいの研究成果は、その一部として活字化されるようになった。

ただ、1887年の紀要刊行開始以来、完成した原稿から順番に刊行する方針は基本的に貫かれたようで、単一の号で複数冊となった『百科全書』を除くと、刊行年と号数とが逆転することはほとんどない。これが結果として、相互に関連しあう内容の号が、全然別の号として刊行されることとなる。したがって以下の紹介は、紀要の番号順（刊行順）にはせず、対象地域別にまとめて、必要に応じてそのなかで言語学、民族学、考古学、形質人類学にさらに分けることにした。この方が「アメリカ民族学局紀要」の出版傾向も明確になるからである。見慣れぬ先住民部族名が頻出するので、関連するものを一括させるほうが、日本人読者の理解の一助になることも考えた。さらに『人類学研究論集』の個別の論考・報告も独立させて、上記のカテゴリーに入れることとした。この場合個々の論考・報告を、○号（刊行年）、AP, No.◇で区別する。また『南アメリカ大陸先住民民族百科全書』と『河川流域低地における（ダム建設に先立つ）行政発掘調査の成果集』の内容は16、17章として独立させた。

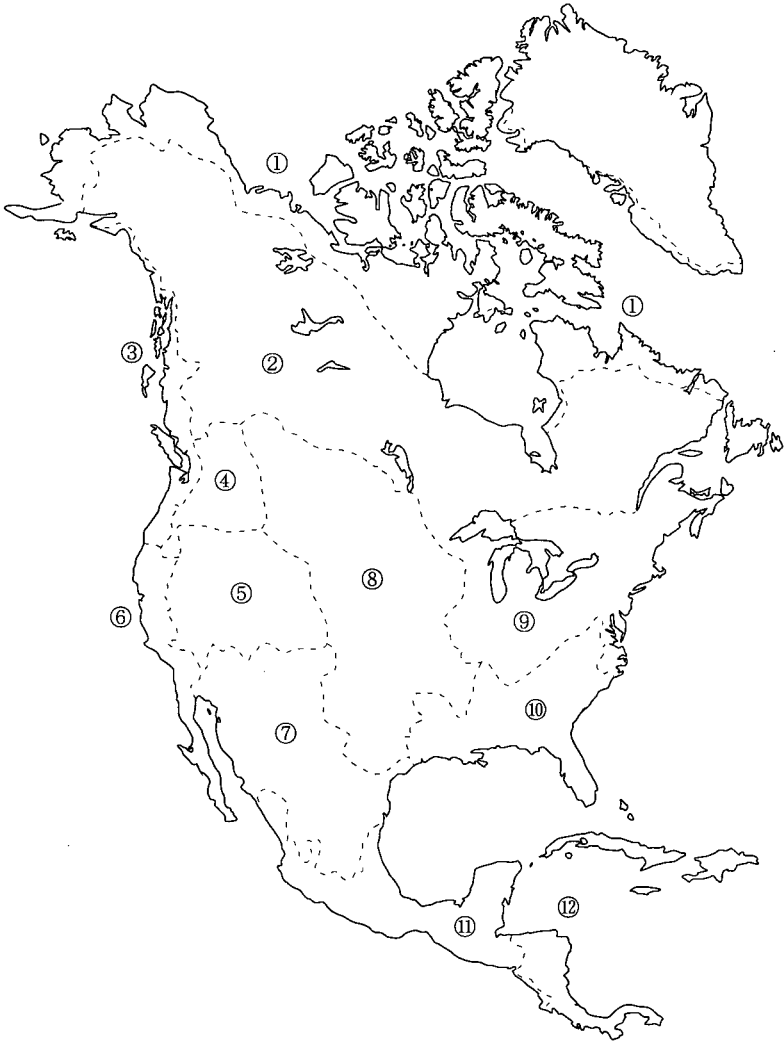
通常号の内容紹介の方法は次の通りである。まず紀要の号数と（括弧）内に発行年を入れた。『 』で日本語訳タイトルを出し、次にイタリック体でもとのタイトルを入れた。そして著者・編者名、本文の総ページ数（算用数字の前にIXなどローマ数字で示してあるのが、序言・目次などの総ページ数である）、図版数(pls.)・挿図数(figs.)の順であげる。わかる範囲内で、個々の号の内容を解説した。なお、『人類学研究論集』は2～15章の内容紹介の部分では書誌学的情報が入らないため、ここでリスト

しておきたい。

119(1938). *AP*, 1-6号, IX+204 pp., 12 pls., 7 figs.; 123(1939). *AP*, 7-12号, VIII+305 pp., 32 pls., 27 figs.; 128(1941). *AP*, 13-18号, XII+368 pp., 52 pls., 77 figs.; 133(1943 [1944]). *AP*, 19-26号, IX+615 pp., 34 pls., 62 figs.; 136(1943 [1944]). *AP*, 27-32号, VII+375 pp., 32 pls., 5 figs.; 151(1953). *AP*, 33-42号, IX+507 pp., 37 pls., 25 figs., 7 maps.; 157(1955). *AP*, 43-48号, III+415 pp., 76 pls., 23 figs.; 164(1957). *AP*, 49-56号, X+355 pp., 75 pls., 20 figs.; 173(1960). *AP*, 57-62号, III+498 pp., 61 pls., 37 figs., 2 maps.; 186(1963). *AP*, 63-67号, IV+310 pp., 60 pls., 35 figs., 2 maps.; 191(1964). *AP*, 68-74号, III+425 pp., 104 pls., 55 figs., 13 maps.; 196(1966). *AP*, 75-80号, III+470 pp., 4 pls., 14 figs., 2 maps, 26 tables.

先住民族の部族名・言語名、さらに一般的でない地名はカタカナ表記のあとに、アルファベットのスペルを入れた。北アメリカの先住民族の部族名・言語名のカタカナ表記は、青木晴夫1979『アメリカ・インディアン』（講談社現代新書543）に従った。研究者の名前は、第19章で取り上げた人を除き、アルファベットのままとした。『河川流域低地における（ダム建設に先立つ）行政発掘調査の成果集』と『南アメリカ大陸先住民族百科全書』については、各節・報告の和訳タイトルを「 」内に記した（英文のオリジナルタイトルはいれなかった）。最後に、「アメリカ民族学局紀要」に貢献した研究者の中から、貢献度が高い（複数の号を執筆している）研究者と著名人を選んで、第19章で簡単に人物解説を試みた。

その他、著者名、テーマ別の索引が付された『アメリカ民族学局出版目録 *List of the publications of the Bureau of Ethnology*』も紀要 Bulletin シリーズの一部として刊行されている。24号(1894)、31号(1906)、36号(1907)、49巻(1910)、58号(1914)、178号(1963)、200号(1967)である。178号は1~100号の総索引、最終号の200号はアメリカ民族学局刊行物の総索引で、書誌学的にも大変便利である。



図：北アメリカ大陸の文化的地理区分

- ①北極圏、② 亜北極圏、③ 北西海岸、④ 高原、⑤大盆地、⑥カリフォルニア、⑦南西部
- ⑧大平原、⑨北東部、⑩南東部、⑪メソアメリカ、⑫中央アメリカ・カリブ海沿岸地域

1. アメリカ大陸の文化的地理区分

北アメリカ大陸は一般的に以下の通り区分することが多い(図)。北極圏、亜北極圏、北西海岸地帯、高原、大平原、大盆地、カリフォルニア、南西部、北東部(森林地帯)、南東部、メソアメリカ、カリブ海沿岸地域、中央アメリカ⁽¹⁾。これは地理的区分であると同時に、似たような習慣を維持する先住民族の居住範囲にも拠るもので、文化的な区分でもある。この区分は考古学でも使われている。というのは、例えば、南西部のプエブロの遺跡は、現在の南西部の先住民族の祖先が残したことが明らかで、したがって、現代の民族学的地理区分も、考古学的に遡りうるという暗黙の前提がある。

その他、今回の紀要紹介の枠組みとは直接関係ないが、北アメリカ大陸先住諸民族の言語学的分類があることも言及しておく必要がある。文化的地理区分のひとつである北極圏・亜北極圏の場合は、それがそのまま言語学的区分にも相当するのであるが、北アメリカ大陸先住民たちは、自ら移住もしたし、白人侵入以後は強制的にも移住させられたため、言語学的に同一系譜の言葉を使う部族が、いくつか「飛び地」のように、離れた場所で生活している場合もある。以下の解説では、その部族がどの言語学的グループ(語族)に属しているかも若干触れることとする。

2. 北極圏 Arctic

北極圏は、アメリカ合衆国アラスカ州北部、カナダ北部、さらにグリーンランド沿岸地域である。グリーンランドは、政治的にはヨーロッパのデンマーク領であるが、地理的には北アメリカ大陸の延長である。民族学的・言語学的に、この地域に居住するのはアレウト Aleut 族とイヌイト Inuit 族である。「アメリカ民族学局紀要」に収められた報告・論考は、言語学が1件、民族学が2件、考古学が2件である。

⁽¹⁾この地域文化圏の訳語も基本的に青木(1979)文献に従っている。ただし、青木(1979)は、高原・大盆地・カリフォルニアを「西部文化圏」とひとつにまとめる。このように地域区分に限らず、部族の分類など、研究者による若干の立場の違いは今でも残る。

- 1(1887). 『エスキモー語関係の文献目録』 *Bibliography of the Eskimo language*, James Constantine Pilling 著, 116 pp. (8 pp.の写真を含む).
- 133(1943). *AP*, No. 24. 「アジアとアメリカにおけるトリカブトの毒を使った捕鯨—アリューシャン列島から新大陸への移動 Aconite poison whaling in Asia and America: An Aleutian transfer to the New World」 Robert F. Heizer 著. pp. 415-468, pls. 18-23A.
- 171(1959). 『アラスカ北部のイヌイト人—生態学と社会の研究』 *The North Alaskan Eskimo: A study in ecology and society*, Robert F. Spencer 著. VI+490 pp., 9pls., 2 figs., 4 maps.
- 192(1964). 『アラスカ州ヤクタット湾地域の考古学』 *Archeology of the Yakutat Bay area, Alaska*, Frederica de Laguna・Francis A. Riddell・Donald F. McGeein・Kenneth S. Lane・J. Arthur Freed・Carolyn Osborne 共著. XI+245 pp., 19 pls., 25 figs., 7 maps.
- 199(1967). 『アラスカ州クロウ村落の民族考古学』 *The ethnoarcheology of Crow Village, Alaska*, Wendell H. Oswalt・James W. VanStone 共著. VIII+136 figs., 16 pls., 1 map.

3. 亜北極圏 Sub-Arctic

亜北極圏は、カナダとアメリカ合衆国アラスカ州の内陸部全域を含む、極めて広大な地域である。その大半はタイガと呼ばれる寒帯針葉樹林で覆われている。「アメリカ民族学局紀要」に収められた報告・論考は、言語学が2件、民族学が1件のみである。

- 14(1892). 『アサパスカ諸語関係の文献目録』 *Bibliography of the Athapascan languages*, James Constantine Pilling 著. XIII+125 pp. (incl. 4 pp. facsimiles). アサパスカ諸語は亜北極圏で使われた。
- 123(1939). *AP*, No. 8. 「亜北極圏のクリーとモンタグナイス・ナスカピ方言の言語学的分類 Linguistic classification of Cree and Montagnais-Naskapi dialects」 Truman Michelson 著. pp. 67-95. クリー族はアルゴンキン語族で、カナダにおける毛皮交易で大変重要な役割を果たした。モンタグナイス・ナスカピ族はカナダのケベックと

ラブラドル地域に居住していたアルゴンキン語族の一族である。

133(1943). *AP*, No. 25. 「バルクレー川のキャリアー族—社会的・宗教的生活 *The Carrier Indians of the Bulkley River: Their social and religious life*」 Diamond Jenness 著. pp. 469-586, pls. 24-34. キャリアー族は亜北極圏の南西隅を故郷とし、現在はブリティッシュ・コロンビア州のコースト（沿岸）山脈とロッキー山脈に挟まれた地域に居住している。

4. 北西海岸 Northwest Coast

北西海岸地域は、アメリカ合衆国アラスカ州南端からカリフォルニア州北端まで3,200kmと南北に細長い地域で、その東西幅は広いところでも240kmしかない。これは、海岸のすぐ背後にまで山脈が迫っており、山間部はその違った生活習慣故、別の文化的地理区分に属してしまうからである。この地域には、カナダのブリティッシュ・コロンビア州、アメリカ合衆国ワシントン州、オレゴン州の各西部が含まれる。さらに、ヴァンクーヴァー島、クィーン・シャーロット島を始めとして、島が多いことも特色である。高緯度の割には、黒潮のお蔭で比較的温暖であり、またサケなど海の幸に大変恵まれていた。お陰で、狩猟採集経済を営んでいたが、定住生活を送り、生活は優雅でさえあった。また酋長・貴族・平民・奴隷という社会的な階層分化も存在した。世界史のなかで、定住化した狩猟採集民の事例はこの地域の先住民族と日本列島の縄文人だけであり、したがって縄文時代研究において、社会構造に関する仮説の素材としてよく引用される。この地域を対象とした報告・論考は数が多いので、分野別に分類して紹介する。

A. 総合人類学

172(1960). 『トリングット共同体の話—考古学・民族学・歴史学の方法論の関係に関する問題』 *The story of a Tlingit community: A problem in the relationship between archeological, ethnological, and historical methods*, Frederica de Laguna 著. X+254 pp., 11 pls., 18 figs. トリリングットは北アメリカ北西海岸の先住民族の一部族で、現在のアラス

カ南部からブリティッシュ・コロンビア州北部にかけて居住していた。

B. 言語学

- 15(1893).『チヌーク諸語関係の文献目録』 *Bibliography of the Chinookan languages* (including the Chinook jargon), James Constantine Pilling 著. XIII+81 pp. (incl. 3 facsimiles). チヌーク族は、北アメリカ北西部ワシントン州、オレゴン州のコロンビア川流域に居住、漁業を営みながら生活していた。
- 19(1894).『ワカシャン諸語関係の文献目録』 *Bibliography of the Wakanishan languages*, James Constantine Pilling 著. XI+70 pp. (incl. 2 pp. facsimiles). ワカシャン語は、カナダのブリティッシュ・コロンビア州ヴァンクーヴァー島北部と同州太平洋岸で使われた。
- 20(1894).『チヌーク語テキスト』 *Chinook texts*, Franz Boas 著. 278 pp., 1 pl.
- 26(1901).『カスラメット語テキスト』 *Kathlamet texts*, Franz Boas 著. 261 pp., 1 pl.
- 27(1902).『チムシアン語テキスト』 *Tsimshian texts*, Franz Boas 著. 244 pp. チムシアン語はブリティッシュ・コロンビア州北部の3つの部族が使っていた言葉である。
- 29(1905).『ハイダのテキストと神話』 *Haida texts and myths: Skidegate dialect*, John Reed Swanton 著. 448 pp., 5 figs. ハイダは北アメリカ北西海岸先住民族の一部族で、もともとカナダのクィーン・シャーロット Queen Charlotte 諸島とアラスカのプリンス・オブ・ウェールズ Prince of Wales 島に居住していた。
- 39(1909).『トリングットの神話と言葉』 *Tlingit myths and texts*, John R. Swanton 記録・採録. VIII+451 pp.
- 67(1920).『アルセア語のテキストと神話』 *Aleut text and myths*, Leo J. Frachtenberg 著. 304 pp. アルセア族はヤコナン Yakonan 族ともいい、シウスラウ族と共に、オレゴン州太平洋岸に居住していた。

C. 民族学・民族音楽学

- 124(1939).『ヌーツカ族とクイルート族の音楽』 *Nootka and Quileute music*, Frances Densmore 著. XXVI+358 pp., 24 pls., 7 figs., 歌210

曲。ヌーツカ族はブリティッシュ・コロンビア州ヴァンクーヴァー島西部にもともと居住、クイルート族はワシントン州北西部に居住していた。

136(1943). *AP*, No. 27. 「ブリティッシュ・コロンビア州先住民の音楽 Music of the Indians of British Columbia」 Frances Densmore 著. pp. 1-99, pls. 1-9, 歌98曲.

144(1951). 『ヌーツカ族の北部と中部の諸部族』 *The Northern and Central Nootkan tribes*, Philip Drucker 著. IX+480 pp., 5 pls., 28 figs., 8 maps.

168(1958). 『先住民の「兄弟」関係—北アメリカ北西海岸における近代の部族間組織』 *The Native Brotherhoods: Modern intertribal organizations on the Northwest Coast*, Philip Drucker 著. IV+194 pp.

D. 考古学

133(1943). *AP*, No. 20. 「北アメリカ北西海岸北部の考古学的踏査 Archeological survey on the northern Northwest Coast」 Philip Drucker 著. (Edna M. Fisher によるブリティッシュ・コロンビア州太平洋沿岸の初期の脊椎動物に関する報告を収める). pp. 17-142, pls. 5-9.

5. 高原 Plateau

高原地域とは、コロンビア高地のことで、その範囲は、カスケード山脈とロッキー山脈に挟まれ、北はカナダのフレーザー川、南は大盆地で区切られる。現在のブリティッシュ・コロンビア州南東部、ワシントン州西部、オレゴン州北東部と中部、アイダホ州北部、モンタナ州西部とカリフォルニア州北部の極一部が含まれる。この地域を対象とした報告は以下の言語学の報告1件、言語学・民族学的内容の1件と、次章で取り上げる大盆地とこの地域の両方の地域の民族学を扱った120号のみである。

16(1893). 『セイリッシュ諸語関係の文献目録』 *Bibliography of the Salishan languages*, James Constantine Pilling 著. XIII+86 pp. (incl. 4 pp. facsimiles). セイリッシュ諸語は、北アメリカ北西海岸地域 (アメ

リカ合衆国ワシントン州とカナダのブリティッシュ・コロンビア州)とその背後の高原(ワシントン州からモンタナ州)で使われた。(北西海岸・高原)

59(1918).『クーテニー民話』 *Kutenai tales*, Franz Boas 著 (Alexander Francis Chamberlain 採集のクーテニー語テキストを収録). XII+387 pp. クーテニーはモンタナ州北西部、アイダホ州北部、ワシントン州北東部、ブリティッシュ・コロンビア州南東部に居住していた。

6. 大盆地 Great Basin

大盆地は、東をロッキー山脈、西をシエラ・ネヴァダ山脈、北をコロンビア高地、南をコロラド高地に囲まれた、砂漠の盆地である。この地域の先住民族たちは部族の違いがあれ、基本的におなじ生活習慣を維持していた。現在のネヴァダ、ユタ州とアイダホ、オレゴン、ワイオミング、コロラド、カリフォルニア州の一部、アリゾナ、ニュー・メキシコ、モンタナ州の極一部を含む。

A. 民族学・民族音楽学

75(1922).『北部ユート族の音楽』 *Northern Ute music*, Frances Densmore 著. 213 pp., 16 pls., 21 figs., 歌110曲. ユート族はショショーニ Shoshone 族に属し、コロラド州西部とユタ州中部・東部に居住していた。

119(1938). *AP*, No. 5. 「レムヒ・ショショーニ族の身体治療 Lemhi Shoshoni physical therapy」 Julian H. Steward 著. pp. 177-181.

119(1938). *AP*, No. 6. 「オウエンズ・ヴァレー・パユート族のひとりバナツビジ Panatubiji', an Owens Valley Paiute」 Julian H. Steward 著. pp. 183-195. オウエンズ・ヴァレー・パユート族はユト・アズテク語族に属し、シエラ・ネヴァダ山脈南部に併行するオウエンズ峡谷に居住していた。

120(1938).『大盆地と高原地域の先住民族の社会・政治的集団』 *Basin-plateau aboriginal sociopolitical groups*, Julian H. Steward 著. XII+346 pp., 3 pls., 13 figs.

- 136(1943). *AP*, No. 31. 「ウェスタン・ショショーニ族の神話 Some western Shoshoni myths」 Julian H. Steward 著. pp. 249-299.
- 151(1953). *AP*, No. 41. 「ウィンド・リヴァー・ショショーニ族の太陽ダンス The Wind River Shoshone Sun Dance」 D. B. Shimkin 著. pp. 397-484, pls. 30-37.
- 151(1953). *AP*, No. 42. 「ウィンド・リヴァー・ショショーニ族の太陽ダンスの最新の傾向 Current trends in the Wind River Shoshone Sun Dance」 Fred W. Voget 著. pp. 485-499.
- 157(1955). *AP*. No. 47. 「北部ユート族の太陽ダンス The Sun Dance of the Northern Ute」 J. A. Jones 著. pp. 203-263.
- 164(1957). *AP*. No. 55. 「パユート族の占い師ジャック＝ウィルソンへの1908～1911に書かれた手紙 Letters to Jack Wilson, the Paiute Prophet, written between 1908 and 1911」 Grace M. Dangberg 解説・編集. pp. 279-296.

B. 考古学

- 82(1926). 『コロラド川以北の考古学的観察』 *Archeological observations north of the Rio Colorado*, Neil M. Judd 著. IX+171 pp., 61 pls., 46 figs.
- 116(1937). 『グレート・ソルト・レーク地域の古代洞穴遺跡』 *Ancient caves of the Great Salt Lake region*, Julian H. Steward 著. XIV+131 pp., 9 pls., 1 map, 48 figs. 現在のネヴァダ州・ユタ州にまたがる砂漠地域の考古学的調査である。
- 128(1941). *AP*, No. 18. 「ユタ州南部の考古学的踏査 Archeological reconnaissance of southern Utah」 Julian H. Steward 著. pp. 275-356, pls. 43-52.

7. カリフォルニア

カリフォルニアは、現在のアメリカ合衆国カリフォルニア州だけではなく、現在メキシコ領のカリフォルニア半島全域も含まれる。逆に、カリフォルニア州背後のシエラ・ネヴァダ山脈は大盆地に含まれる。この地域

には20以上の先住民族が知られ、実際人口密度も北アメリカ大陸の他の地域の3～4倍高かった。言語も多様で、北極圏・亜北極圏で使われたアレウト語族以外の主要語族に属する言語のほとんどがカリフォルニアでは使われていた。特にカリフォルニア州北西部は、言語分布において、世界で最も複雑な地域と言われる。

A. 総合人類学

78(1925).『カリフォルニア先住民族百科全書』*Handbook of the Indians of California*, A. L. Kroeber 編. XVIII+995 pp., 83 pls. (別添の地図1葉を含む), 78 figs. 本書は1976年にニュー・ヨークのDover Publicationより復刻されており、現代的価値の高い学術書である。

B. 民族学

94(1932).『カリフォルニアのカロク族のタバコ』*Tobacco among the Karuk Indians of California*, John P. Harrington 著. XXXVI+284 pp., 36 pls., 2 figs. カロク族はカリフォルニア州北西部、オレゴン州との州境付近に居住していた。彼らの言語は、周辺で話されているどの言語とも関係がなく、独立している。

107(1932).『カリフォルニア カロク族の神話』*Karuk Indian myths*, John P. Harrington 著. V+34 pp.

151(1953). AP, No. 39.「上部及びバホ・カリフォルニアの太平洋上の先住民族による航海 Aboriginal navigation off the coasts of Upper and Baja California」Robert F. Heizer・William C. Massey 共著. pp. 285-311, pls. 20-23, 地図5-7.

175(1961).『モハビ砂漠での民族心理学と自殺—ある先住民の部族の精神医学的知識と心理障害』*Mohave ethnopsychiatry and suicide: The psychiatric knowledge and the psychic disturbances of an Indian tribe*, George Devereux 著. VI+586 pp., 10 pls. モハビ砂漠はカリフォルニア州南端、アリゾナ州との境界地域に位置する。

C. 考古学

2(1887).『カリフォルニア州の穿孔された石』*Perforated stones from California*, Henry Weherbee Henshaw 著, 34 pp., 16 figs.

130(1941).『カリフォルニア州ケーン郡ブエナ・ヴィスタ・レークでの考

古学調査』 *Archeological investigations at Buena Vista Lake, Kern County, California*, Waldo R. Wedel 著. T. D. Stewart による人骨の報告も附載. VIII+194 pp., 57 pls., 19 figs.

8. 南西部 Southwest

南西部は、現在のアメリカ合衆国アリゾナ、ニュー・メキシコ州の大半と、カリフォルニア、ユタ、コロラド、テキサス州の一部、さらにメキシコ合衆国北部の大半を含む。この地域のほとんどが砂漠である。この地域はプエブロ族など先住民族がその文化を近年までよく継承していること、彼らの先祖たちが営んだ集落遺跡が付近に存在すること、そしてそういった遺跡が地表から突出してよく残されていること⁽²⁾、といった理由により、アメリカ合衆国における人類学、特に考古学研究のメッカである。例えば、考古資料のみに依拠して、文字のない時代の社会構造をモデル化するのは大きな困難を伴うが、この地域では遺跡を残した先住民たちの子孫が付近に居住しており、現存する先住民の社会構造と集落遺跡を統合解釈することにより、遺跡から先史時代社会に迫る試みが早くから活発に実践された地域である（本稿19章、ワルドー＝ウェデルの項、「直接歴史的的研究法」を参照）。したがって、この地域を対象とする報告・論考は大変多いし、ほかの地域に比べ考古学的文献の占める率が高いのも、この地域を対象とした人類学研究の傾向と言えよう。

A. 言語学

- 127(1940). 『テキサス南部とメキシコ北東部の諸部族の言語学的資料』
Linguistic material from the tribes of southern Texas and northeastern Mexico, John R. Swanton 著. V+145 pp.
- 191(1964). *AP*. No. 69. 「プエブロ サンタ・アナの言語 The language of Santa Ana Pueblo」 Irvine Davis 著. pp. 53-190.

⁽²⁾英語では、地表から突出して建造物などが残る遺跡を ruin、すべて地下に埋まっている遺跡を site と区別する。本稿の日本語訳では、英文タイトルを付しているので、両方とも「遺跡」と訳した。

B. 民族学・民族音楽学

- 54(1913).『ニュー・メキシコ州リオ・グランデ峡谷の自然・地理—プエブロ文化に関連して』*The physiography of the Rio Grande Valley, New Mexico, in relation to Pueblo culture*, Edgar Lee Hewett・Junius Henderson・Wilfred William Robbins 共著. 76 pp., 11 pls., 2 figs. 執筆分担は、Hewett が「リオ・グランデ峡谷」、Henderson が「峡谷地域の地質と地形」、Henderson と Robbins が「気候と気候変動の証拠」
- 55(1916).『テワ族の民族植物学』*Ethnobotany of the Tewa Indians*, Wilfred William Robbins・John Peabody Harrington・Barbara Freire-Marreco 共著. XII+124 pp., 9 pls., 7 figs. テワ族は、現在のニュー・メキシコ州サンタ・フェ北部に居住するプエブロ諸部族のひとつであり、Nambe, Pojoaque, San Ildefonso, San Juan, Santa Clara, Tesuque として知られる。本書は彼ら独特の植物利用を報告したものである。
- 56(1914).『テワ族の民族動物学』*Ethnozoology of the Tewa Indians*, Junius Henderson・John Peabody Harrington 共著. X+76 pp. 「民族動物学」とは、民族固有の動物利用などを研究する学問である。
- 90(1929).『パパゴ族の音楽』*Papago music*, Frances Densmore 著. XX+229 pp, 19 pls., 4 figs, 167 songs. パパゴ族は、トホノ・オオダム Tohono O'odham と自称し、現在のアリゾナ州南西部とメキシコ合衆国との国境に沿ったカリフォルニア湾付近のソノラ Sonoran 砂漠に居住していた。彼らの言葉は、ウト・アズテク Uto-Aztecan 諸語の方言である。
- 97(1931).『インペリアル峡谷のカミア族』*The Kamia of Imperial Valley*, E. W. Gifford 著. VII+94 pp. 2 pls., 4 figs. カミア族はカリフォルニア州南端とメキシコ合衆国との国境地域に居住していた。
- 98(1931).『プエブロ コチティ族の民話』*Tales of the Cochiti Indians*, Ruth Benedict 著. X+256 pp. コチティ族の村はニュー・メキシコ州リオ・グランデ川西岸に位置し、彼らの言語はプエブロ族諸語からは独立している。

- 110(1932).『ユマ族とヤキ族の音楽』 *Yuman and Yaqui music*, Frances Densmore 著. XVIII+216 pp., 31 pls., 7 figs., 歌130曲. ユマ族はコロラド川流域、メキシコ国境からあまり遠くない地域に、ヤキ族はメキシコ合衆国北部、カリフォルニア湾に面したソノラ州に居住していた。
- 111(1932).『ニュー・メキシコ州のズニ族居留区に所在するグレート・キヴァ村』 *The village of the Great Kivas on the Zuni Reservation, New Mexico*, Frank H. H. Roberts, Jr. 著. IX+197 pp., 64 pls., 34 figs. 村の名前の一部になっている「キヴァ」とは南西部の先住民民族特有の円形地下式祭祀遺構である。
- 135(1942).『アコマ族の起源神話と他の記録』 *Origin myth of Acoma and other records*, Matthew W. Stirling 著. VIII+123 pp., 17 pls., 8 figs. アコマ族はケレス Keres 語を使うプエブロ族で、ケレス語分布の最西端に位置する。またアコマ族の集落はプエブロで現在でも伝統的な生活を維持しており、北アメリカでは現在まで継続している最古の集落でもある。アルバカーキの西80kmに位置するその集落は「空の町 Sky City」とも呼ばれ、比高差100mの高所にある。
- 136(1943). *AP*, No. 32. 「アコマ族の新しい資料 New material from Acoma」 Leslie A. White 著. pp. 301-359, pls. 29-32.
- 142(1945).『カヒタ族の現代文化』 *The contemporary culture of the Cahita Indians*, Ralph L. Beals 著. XII+244 pp., 20 pls., 33 figs., 1 map.
- 163(1956).『ディネーナヴァホ族の起源神話』 *The Dine: Origin myths of the Navaho Indians*, Aileen O'Bryan 著. VII+194 pp.
- 165(1957).『プエブロのアコマ、イスレタ、コチティ、ズニ族の音楽』 *Music of Acoma, Isleta, Cochiti, and Zuni Pueblos*, Frances Densmore 著. XII+117 pp., 6 pls., 82曲の採録. プエブロのイスレタは、リオ・グランデ川西岸、現在のアルバカーキから20km南に集落を営んでいた。
- 164(1957). *AP*. No. 56. 「ニュー・メキシコ州プエブロのタオスの派閥争い Factionalism at Taos Pueblo」 William N. Fenton 著. pp. 297-344. pls. 74-75.

- 181(1962).『イスレタ絵画』 *Isleta paintings*, Elsie Clews Parsons による紹介とコメント. Esther S. Goldfrank 編集, George L. Trager によるイスレタの解説付き用語集. XVI+299 pp., 142 pls. (内12はカラー図版).
- 184(1962).『ニュー・メキシコ州プエブロ族のシア』 *The Pueblo of Sia*, New Mexico, Leslie A. White 著. XII+358 pp., 12 pls., 55 figs. シアはケレス語を使うプエブロ族で、ニュー・メキシコ州アルバカーキの北50kmのジェメズ Jemez 川流域に居住している。
- 186(1963). *AP*. No. 66. 「ヤキ族の鹿ダンス—文化変化の一研究 *The Yaqui Deer Dance: A study in cultural change*」 Carleton Stafford Wilder 著. pp. 145-210, pls. 39-42.
- 188(1963). 「ショント—近代ナヴァホ共同体における貿易商の役割に関する研究」 *Shonto: A study of the role of the trader in a modern Navaho community*, William Y. Adams 著. XI+329 pp., 10 pls., 3 figs., 3 maps, 12 charts.
- 196(1966). *AP*. No. 76. 「南西部アパッチ族における変容する女性の贈り物 *The Gift of Changing Woman*」 Keith H. Basso 著. pp. 113-173.
- 196(1966). *AP*. No. 79. 「ナヴァホ族のラマー集落 *The Ramah Navaho*」 Clyde Kluckhohn 著. pp. 327-377. これは、ハーヴァード大学付属ピーボディー人類学博物館が1949年から1955年にかけて行ったナヴァホ諸族の民族学的調査の報告の一部であるが、諸般の事情で「ピーボディー人類学博物館研究報告 *Papers of the Peabody Museum*」シリーズに収録されなかった原稿である。同「研究報告」第40巻1～4号と第42巻第1, 2号が Ramah Project の報告である。
- 197(1966).『ナヴァホ族の人口に関する情報の史料分析』 *An analysis of sources of information on the population of the Navaho*, Denis Foster Johnston 著. V+220 pp., 7 maps, 36 tables.
- C. 考古学
- 32(1906).『ニュー・メキシコ州ジェメズ高地の古代遺物』 *Antiquities of the Jemez Plateau, New Mexico*, Edgar L. Hewett 著. 55 pp., 17 pls. (incl. 1 map), 31 figs.

- 35(1907). 『アリゾナ州とニュー・メキシコ州のジャイラ川上流、ソルト・リヴァー峡谷の古代遺物』 *Antiquities of the upper Gila and Salt River valleys in Arizona and New Mexico*, Walter Hough 著. 96 pp., 11 pls. (incl. 1 map), 51 figs.
- 41(1909). 『スプルス・トゥリー・ハウス—メサ・ヴェルデ国立公園の古代遺物』 *Antiquities of the Mesa Verde National Park: Spruce-tree House*, Jesse Walter Fewkes 著. VIII+57 pp., 21 pls., 37 figs. 世界遺産にも指定されているメサ・ヴェルデ国立公園に所在するスプルス・トゥリー・ハウス遺跡の紹介・検討。この地域は崖住居 Cliff Dwelling といって、岩陰に複数階のアパートを築く文化で知られる。
- 50(1911). 『アリゾナ州ナヴァホ国立公園訪問の概要報告』 *Preliminary report on a visit to the Navaho National Monument, Arizona*, Jesse Walter Fewkes 著. VII+35 pp., 22 pls., 3 figs. ナヴァホ族居住地はアリゾナ州北東部に広く分布し、そこへの訪問記である。
- 51(1911). 『クリフ・パレス—メサ・ヴェルデ国立公園の古代遺物』 *Antiquities of the Mesa Verde National Park: Cliff Palace*, Jesse Walter Fewkes 著. 82 pp., 35 pls., 4 figs. メサ・ヴェルデ国立公園のなかで最大の遺跡であるクリフ・パレスの出土遺物の報告書である。
- 65(1919). 『アリゾナ州北東部の考古学的調査』 *Archeological explorations in northeastern Arizona*, Alfred Vincent Kidder・Samuel J. Guernsey 共著. 228 pp., 97 pls., 102 figs. バスケット・メーカー文化と Cliff Dwelling との関係を論じたもの。
- 70(1919). 『コロラド州南西部の先史時代村落、城跡、塔跡』 *Prehistoric villages, castles, and towers of southwestern Colorado*, J. Walter Fewkes 著. 79 pp., 33 pls., 18 figs.
- 81(1923). 『ニュー・メキシコ州チャマ峡谷での発掘調査』 *Excavations in the Chama Valley, New Mexico*, J. A. Jeancon 著. IX+80 pp., 65 pls., 38 figs.
- 92(1929). 『シャビクエシュチー村落—ニュー・メキシコ州チャコ・キャニオンのバスケット・メーカー後期の遺跡』 *Shabik'eshchee village: A late Basket Maker site in the Chaco Canyon, New Mexico*, Frank

Harold Hanna Roberts, Jr. 著. VIII+164 pp., 31 pls., 32 figs. バスケット・メーカー後期は A.D. 200-500。

96(1930). 『コロラド州南西部ピエドラ地区の初期プエブロの遺跡群』
Early Pueblo ruins in the Piedra district, southwestern Colorado,
Frank H. H. Roberts, Jr. 著 IX+190 pp., 55 pls. 40 figs.

100(1931). 『アリゾナ州東部キアトゥスランナ遺跡群』 *The ruins at Kiatuthlanna, eastern Arizona*, Frank H. H. Roberts, Jr. 著. VIII+195 pp., 47 pls., 31 figs.

104(1932). 『アリゾナ州フラグスタッフ地域の先史時代遺跡群の踏査』
A survey of prehistoric sites in the region of Flagstaff, Arizona,
Harold S. Colton 著. VII+69 pp., 10 pls. (incl. 4 maps), 21 figs.

121(1939). 『アリゾナ州東部のホワイトウォーター地域の考古遺跡』
Archeological remains in the Whitewater District, eastern Arizona.
第1部：住居形態 Frank H. H. Roberts, Jr. 著. XII+276 pp., 30
pls., 53 figs.

126(1940). 『アリゾナ州東部のホワイトウォーター地域の考古遺跡』
Archeological remains in the Whitewater District, eastern Arizona.
第2部：遺物と墓 Frank H. H. Roberts, Jr. 著、人骨は T. D.
Stewart 著. XI+170 pp., 57 pls., 44 figs.

D. 形質人類学

34(1908). 『アメリカ合衆国南西部・メキシコ北部先住民の生理学的・医学的観察』 *Physiological and medical observations among the Indians of southwestern United States and northern Mexico*, Aleš Hrdlička 著. IX+460 pp., 28 pls., 2 figs.

9. 大平原 Great Plains

大平原 (グレート・プレーンズ) 地域はロッキー山脈の東麓のノース・ダコタ州、サウス・ダコタ州、ネブラスカ州、カンザス州の全域、モンタナ州、ミネソタ州、アイオワ州、ミズーリ州、アーカンソー州、オクラホマ州、テキサス州のほぼ全域、カナダのアルバータ州、サスカチュワン准

州、マントバ州、合衆国のワイオミング州、コロラド州の一部、ウィスコンシン州、ニュー・メキシコ州、ミシシッピ州の極一部にまたがる広大な地域を指す。アメリカ・インディアンというとプレインズ・インディアンを暗黙のうちに意味するほど、大平原地域に居住した諸部族が有名なのは、19世紀末という比較的遅い時期まで、彼ら独特の生活習慣を維持していたからであろう。この地域では30ほどの言語が使われていた。スー族など大平原の先住民部族の多くは、狩猟のため移動の生活を送っていた。野牛の皮で衣類を作り、野牛の肉を食べ、野牛の皮のテントに住んでいた。また大平原東部のマンダン族、ヒダツサ族、オマハ族など農耕に依存する部族もあった。こういった部族の場合、南西部地域と同様、遺跡を残した先住民の子孫が現在でも付近に居住しており、したがって考古資料と民族資料を統合解釈することで、先史時代社会に関する議論が早くから活発であった（19章、ワルドー＝ウェデル、「直接歴史学的研究法」を参照）。

A. 総合人類学

173(1960). *AP*. No. 62. 「モンタナ州中北部と隣接するカナダのアルバータ州における円錐形テント（ティーピーtipi とよばれる）用石製の環—歴史的・民族的・考古学的諸側面 Stone tipi rings in north-central Montana and the adjacent portion of Alberta, Canada: Their historical, ethnological, and archeological aspects」 Thomas F. Kehoe 著. pp. 417-473, pls. 48-61. ティーピーはスー語で家のことで、移動に便利なテントであった。頂部には煙出しの穴があり、その両側に2枚の風除けが飛行機の方向舵のようについていた。完成時、底部（床面）の直径が3～4メートルくらいあった。

B. 言語学

5(1887). 『スー諸語関係の文献目録』 *Bibliography of the Siouan languages*, James Constantine Pilling 著, 87 pp. スー族は、白人の侵入時、ロッキー山脈東麓の平原地域北部に広く居住していた先住民の集まりである（だから諸語 languages と複数形）。ダコタ族とも呼ばれる。現在も、サウス・ダコタ、ノース・ダコタ、ミネソタ、ネブラスカ、モンタナ州や一部カナダでも生活している。

84(1928). 『キウワ語の語彙』 *Vocabulary of the Kiowa language*, John

P. Harrington 著. V+255 pp., 1 fig. 言語学的にはキウワ語はプエブロのタノア Tanoan 方言と関係があるとされているが、キウワ族は南西部からかけ離れた北方の、現在のモンタナ州西部に居住していた。

109(1932). 『オーセイジ語辞典』 *A dictionary of the Osage language*, Francis La Flesche 著. V+406 pp. スー諸語族の一部であるオーセイジ族はかつてオハイオ川流域に居住していたが、ミズーリ州に移住した。

C. 民族学・民族音楽学

11(1891). 『オマハ・ポンカの手紙』 *Omaha and Ponka letters*, James Owen Dorsey 著. 127 pp. オマハ族、ポンカ族ともにネブラスカ州に居住する先住民族である。

22(1894 [1895]). 『東部におけるスー族の諸部族』 *The Siouan tribes of the East*, by James Mooney 著. 101 pp., 地図1葉

61(1918). 『スー族ティートンの音楽』 *Teton Sioux music*, Frances Densmore 著. XXVIII+561 pp., 82 pls., 43 figs., 歌240曲. ティートン族はスー族最大・最強の部族で、サウス・ダコタ州西部全域を領土とした。

77(1922). 『ミシシッピ川以西のアルゴンキン、スー、カド諸部族の村落』 *Villages of the Algonquian, Siouan, and Caddoan tribes west of the Mississippi*, David I. Bushnell, Jr. 著. X+211 pp., 55 pls., 12 figs. ミシシッピ川以西、ロッキー山脈以東の大平原地域の先住民族諸部族(殆どすべて)の村落の調査報告である。

80(1923). 『マンダン族とヒダツサ族の音楽』 *Mandan and Hidatsa music*, Frances Densmore 著. XX+192 pp., 19 pls., 6figs., 110曲. マンダン族は大平原地域に最初に移住してきた先住民で、ミズーリ川に沿って、現在のサウス・ダコタ州に落ち着いた。ヒダツサ族はミズーリ川上流のノース・ダコタ州に居住していた。

83(1927). 『ミシシッピ川以西のアルゴンキン、スー、カド諸部族の墓制』 *Burials of the Algonquian, Siouan, and Caddoan tribes west of the Mississippi*, David I. Bushnell, Jr. 著. X+103 pp., 37 pls., 3 figs.

- 93(1929). 『ポーニー族の音楽』 *Pawnee music*, Frances Densmore 著. XVIII+129 pp., 8 pls. 86曲. ポーニー族は、南東部ルイジアナ州からテキサス州に分布するカド諸語族から分岐したグループで、テキサスを起点に北方へ移住、オクラホマ州北部・カンザス州南部のアーカンソー川流域に落ち着いた。先史時代以降、大平原地域に居住した最初の先住民の可能性がある。
- 101(1939). 『オーセイジ族の戦争儀礼・平和儀礼』 *War ceremony and peace ceremony of the Osage Indians*, Francis La Flesche 著. VII+280 pp., 13 pls., 1 fig.
- 115(1937). 『ルドルフ・フレデリック・クルツの日記』 *Journal of Rudolph Friederich Kurz*. Myrtis Jarrell 訳. J. N. B. Hewitt 編集. IX+382 pp., 48 pls.
- 119(1938). *AP*, No. 2. 「北部アラパホの平たい喫煙パイプとパイプを覆う儀礼 The northern Arapaho flat pipe and the ceremony of covering the pipe」 John G. Carter 著. pp. 69-102. アラパホ族はアルゴンキン諸語族に属し、かつてはミネソタ州とノース・ダコタ州に居住していたと言われるが、移住に移住を重ね、現在はワイオミング州とコロラド州に、南北に分かれて生活している。
- 132(1942). 『カド族の歴史と民族学に関する史料』 *Source material on the history and ethnology of the Caddo Indians*, John R. Swanton 著. VII+332 pp., 19 pls., 5 figs.
- 147(1952). 『1850年のマウヴァイセス・テレスとミズーリ川上流への探検日記』 *Journal of an expedition to the Mauvais Terres and the Upper Missouri in 1850*, Thaddeus A. Culbertson 著. John Francis McDermott 編集. VIII+164 pp., 2 maps.
- 148(1952). 『アラパホ族の子供の生活とその文化的背景』 *Arapaho child life and its cultural background*, Sister M. Inez Hilger 著. XV+253 pp., 40 pls., 1 fig.
- 151(1953). *AP*, No. 33. 「クロー国家から Of the Crow Nation」 Edwin Thompson Denig 著. John C. Ewers による著者紹介と脚注、編集. pp. 1-74, pls. 1-6, 地図1. クロー族はモンタナ州とワイオミング州北部

に居住していた。

159(1955).『ブラックフット先住民文化における馬—他の西部地域の部族の比較資料も含む』*The horse in Blackfoot Indian culture, with comparative material from other western tribes*, John Canfield Ewers 著. XV+374 pp., 17 pls., 33 figs. ブラックフット族はアルゴンキン諸語族に属し、大平原地域の現在のカナダ領域内、高地で生活していた。

164(1957). *AP.* No. 50. 「大平原地域の先住民の装飾品である髪パイプ—先住民と白人の創意工夫 Hair pipes in Plains Indian adornment」 John C. Ewers 著. pp. 29-85, pls. 13-37.

173(1960). *AP.* No. 61. 「大平原地域の歴史史料としてのダコタ族の冬の勘定 Dakota winter counts as a source of Plains history」 James H. Howard 著. pp. 335-416, pls. 45-47.

186(1963). *AP.* No. 64. 「ブラック・フット族の喫煙パイプとパイプ製作 Blackfoot Indian pipes and pipe making」 John C. Ewers 著. pp. 29-60, pls. 20-27.

194(1965). 『ヒダツサ族の社会的・儀礼的組織』*Hidatsa social and ceremonial organization*, Alfred W. Bowers 著. XII+528 pp., 12 pls., 12 figs., 5 maps, 14 charts, 4 tables.

195(1965). 『ポンカ部族』*The Ponca tribe*, James Howard 著. XII+191 pp., 24 pls., 8 figs., 地図1葉. ポンカ族はスー諸語族に属し、もともとオハイオ川流域に居住していたが、ミシシッピ川を渡り、西方へ移住し、最終的にはネブラスカとサウス・ダコタの州境となる、ニオブララ Niobrara 川河口に落ち着いた。

D. 考古学

21(1894). 『先住民の領域での石器原石獲得址』*An ancient quarry in Indian Territory*, William Henry Holmes 著. 19 pp., 12 pls., 7 figs.

37(1910). 『ミズーリ州中部・南東部の古代遺物』*Antiquities of central and southeastern Missouri*, Gerard Fowke 著. VII+116 pp., 19 pls., 20 figs. 現在古典考古学の学会となっている「アメリカ考古学研究所 Archaeological Institute of America」は、当時先史考古学の調査も

実施しており、本書は同研究所が1906～07年に著者に依頼した踏査の報告で、ミズーリ州内のマウンドで著者が採集した人骨の、ハードリチカによる報告も含む。

- 112(1936). 『ポーニー考古学概説』 *An introduction to Pawnee archeology*, Waldo Rudolph Wedel 著. XI+122 pp., 12 pls., 10 maps, 12 figs. 1936.
- 157(1955). *AP*. No. 45. 「サウス・ダコタ州モブリッジ周辺の考古資料 Archeological materials from the vicinity of Mobridge, South Dakota」 Waldo R. Wedel 著. pp. 69-188, pls. 55-71.
- 164(1957). *AP*. No. 51. 「ミズーリ川上流域の19世紀の土器の観察 Observations on some nineteenth-century pottery vessels from the Upper Missouri」 Waldo R. Wedel 著. pp. 87-114, pls. 38-45.
- 173(1960). *AP*. No. 58. 「大平原地域アパッチ族の考古学概論—ディスマル・リヴァー・アスペクト An introduction to Plains Apache archeology—the Dismal River Aspect」 James H. Gunnerson 著. pp. 131-260, pls. 1-38.
- 174(1959). 『カンザス考古学概論』 *An introduction to Kansas archeology*, Waldo R. Wedel 著. T. D. Stewart による州内 Doniphan・Scott 郡出土の人骨の記述も含む. XVII+723 pp., 97 pls., 109 figs.

10. 北東部 Northeast

北東部は、東は大西洋岸からミシシッピ川を西端とし、北は五大湖からオハイオ峡谷を南端とする、広大な地域である。現在のメイン、ヴァーモント、ニュー・ハンプシャー、マサチューセッツ、ロード・アイランド、コネチカット、ニュー・ヨーク、ニュー・ジャージー、ペンシルヴァニア、デラウェア、オハイオ、インディアナ、イリノイ、ミシガン州全域と、メリーランド、ウェスト・ヴァージニア、ケンタッキー、ウィスコンシン州の大半、ヴァージニア、ノース・キャロライナ、ミズーリ、アイオワ、ミネソタ州の極一部を含む。またカナダのノヴァ・スコシア、ニュー・ブルンスウィック、プリンス・エドワード・アイランドの全域と、ケベック、

オンタリオ州の一部、そしてマニトバ準州の極一部も含まれる。この地域の大半は森林で覆われているため、この地域をウッドランド Woodland とも言う。一口に森林というが、北部はタイガの寒帯針葉樹林、ニュー・ヨーク、ペンシルヴァニア州は落葉樹と針葉樹、さらにオハイオ州は草原と地形も植生も様々であった。ゆえに先住民の生活も多様であった。言語的には、ほとんどがアルゴンキン諸語族に属する。

A. 言語学

6(1888 [1889]). 『イロコイ諸語関係の文献目録』 *Bibliography of the Iroquoian languages*, James Constantine Pilling 著, 208 pp. (4 pp.の写真を含む), 写真5葉. イロコイ諸族は、現在のニュー・ヨーク州北部を中心に居住していた、モホーク Mohawk、オナイダ Oneida、オノンドガ Onondaga、カユーガ Cayuga、セネカ Seneca、タスカローラ Tuscaroras 族ら先住民の集まりである。

13(1891 [1892]). 『アルゴンキン諸語関係の文献目録』 *Bibliography of the Algonquian languages*, James Constantine Pilling 著. X+614 pp., 82 facsimiles. アルゴンキン諸語は、カナダの大西洋岸からノース・キャロライナまで、また内陸は大平原地域まで、広大な諸地域で使用された。(北東地域・大平原)

25(1903). 『ネイティック語辞書』 *Natick dictionary*, James Hammond Trumbull 著. [Edward Bverett Hale の序論, pp. IX-XIII を含む] XXVIII+349 pp. ネイティックは東部アルゴンキン諸語の一方言であるマサチューセッツ Massachusetts の一変異である。

B. 民族学・民族音楽学

45(1910). 『チブワの音楽』 *Chippewa music*, Frances Theresa Densmore 著. XIX+216 pp., 12 pls., 8 figs., 歌200曲. チブワ語(オジブワ Ojibway 語とも言う)はアルゴンキン諸語に属し、チブワ語を話す先住民は五大湖西部、特にスペリオール湖周辺に居住していた。

53(1913). 『チブワの音楽(続編)』 *Chippewa music-II*, Frances Densmore 著. XXI+341 pp., 45 pls., 6 figs., 歌180曲.

72(1921). 『フォックス族のフクロウの神聖な袋』 *The owl sacred pack of the Fox Indians*, Truman Michelson 著. 83 pp., 4 pls. フォックス

- 語はアルゴンキン諸語のひとつであり、フォックス族はメスクワキ Meskwaki 族とも呼ばれ、もともと五大湖西部地方に居住していた。
- 85(1927).『フォックス民族学の諸論考』 *Contributions to Fox ethnology*, Truman Michelson 著. VII+168 pp., 2 pls., 2 figs. フォックス族関係の3論考を収める。「フォックス族の儀礼的走者」「フォックス族の雷ゲンス gens に属する A'penāwānā'A と呼ばれる神聖な袋」「フォックス族の熊ゲンスに属する Sāgimā'kwāwA と呼ばれる神聖な袋」ゲンス gens とは、父系氏族集団のこと。
- 86(1929).『チプワ族の習慣』 *Chippewa customs*, Frances Densmore 著. XII+204 pp., 90 pls., 27 figs.
- 87(1928).『フォックス族の雷ゲンスのバッファロー頭部のダンス』 *Notes on the Buffalo-head dance of the Thunder gens of the Fox Indians*, Truman Michelson 著. V+94 pp., 1 fig.
- 89(1929).『フォックス族の熊ゲンスの雷ダンス』 *Observations on the Thunder dance of the Bear gens of the Fox Indians*, Truman Michelson 著. V+73 pp., 1 fig.
- 95(1930).『フォックス民族学の諸論考(続編)』 *Contributions to Fox ethnology-II*, Truman Michelson 著. VII+183 pp., 1 fig.
- 102(1932).『メノミニ族の音楽』 *Menominee music*, Frances Densmore 著. XXII+230 pp., 27 pls., 3 figs., 歌140曲。メノミニ族の名前は「野生稲の人々」という意味で、まさしく、野生の稲を収穫して生きていた。彼らは五大湖西部地方に居住していたアルゴンキン諸語族のグループである。
- 105(1932).『フォックス族のワパノウィウエニ Wāpanōwiweni 集団について』 *Notes on the Fox Wāpanōwiweni*, Truman Michelson 著. V+195 pp., 1 fig.
- 114(1937).『フォックス族に関するその他の研究』 *Fox miscellany*, Truman Michelson 著. V+124 pp., 9 figs.
- 119(1938). *AP*, No. 4. 「神聖な袋で神のご加護を受けているグリーン・ベアに何が起こったのか What happened to Green Bear who was blessed with a sacred pack」 Truman Michelson 著. pp. 161-176.

- 125(1939). 『フォックス族の民族誌』 *Ethnography of the Fox Indians*, William Jones 著, Margaret Wepley Fisher 編. IX+156 pp.
- 128(1941). *AP*, No. 14. 「イロコイ族の自殺—文化パターンの安定性に関する研究 Iroquois suicide: A study in the stability of a culture pattern」 William N. Fenton 著. pp. 79-137, pls. 6-8.
- 128(1941). *AP*, No. 15. 「イロコイ族のトナワンダ ロングハウス儀礼—L. H.モルガン90年後 Tonawanda longhouse ceremonies: Ninety years after Lewis Henry Morgan」 William N. Fenton 著. pp. 139-165, pls. 9-18. イロコイ族は、複数の家族が単一の非常に長い住居(ロングハウス)に住んでいたことで知られる。また『古代社会 *Ancient Society*』を1877年に著し一世を風靡したモルガンの人類学的研究の起点はイロコイ族の研究である。
- 128(1941). *AP*, No. 17. 「カナダ ケベック・オンタリオ州のリヴァー・デザート・アルゴンキン族の樺の木の皮を使った入れ物、バッグの製作工程 Art processes in birchbark of the River Desert Algonquin, a circumboreal trait」 Frank G. Speck 著. pp. 229-274, pls. 30-42.
- 146(1951). 『チプワ族の子供の生活とその文化的背景』 *Chippewa child life and its cultural background*, Sister M. Inez Hilger 著. XIV+204 pp., 31 pls., 1 fig.
- 149(1951). 『イロコイ文化の在地の多様性に関するシンポジウム』 *Symposium on local diversity in Iroquois culture*, William N. Fenton 編. V+187 pp., 21 figs. 「序論：在地性の概念とイロコイ研究のプログラム」(William N. Fenton)、「イロコイ族とその近隣部族達の土地所有の概念」(George S. Snyderman)、「イロコイ社会構造の発展における基本因子としての在地性」(William N. Fenton)、「イロコイ共同体における文化変化の幾つかの心理学的決定因子」(Anthony F. C. Wallace)、「ハンサム・レーク Handsome Lake の宗教—その起源と発展」(Merle H. Deardorff)、「イロコイ音楽とダンスの在地で多様性」(Gertrude P. Kurath)、「カナダ 6 箇所の居留区における死の祭り、または幽霊ダンス」(William N. Fenton・Gertrude P. Kurath)、「イロコイ女性の過去と現在」(Martha Champion Randle)

- 150(1952). 『ロールシャッハテストから判明したタスカローラ族のモード パーソナリティ構造』 *The modal personality structure of the Tuscarora Indians as revealed by the Rorschach test*, Anthony F. C. Wallace 著. VIII+120 pp., 1 pl., 8 figs. タスカローラ族はイロコイ諸語族に属し、「イロコイ 6 カ国同盟 Iroquois League of Six Nations」の一翼を成していた。もともとノース・キャロライナ州の北東部とヴァージニア州南東部に居住していたが、後にニュー・ヨーク州に移住した。
- 156(1953). 『イロコイ族の鷲ダンス—カルメット・ダンスの分派』 *The Iroquois Eagle Dance, an offshoot of the Calumet Dance*, William N. Fenton 著, Gertrude Prokosch Kurath による鷲ダンスと歌の分析を附載 VI+324 pp., 28 pls., 36 figs. カルメット calumet とは、北アメリカ先住民独特の、儀礼用の装飾性に富む異常に長い喫煙パイプである。生贄、呪術、宗教儀礼の際使われ、大平原地域ではダンスを踊る。これに対応するイロコイ族のダンスが鷲ダンスである。
- 183(1961). 『セネカ族の感謝祭の儀礼』 *Seneca Thanksgiving rituals*, Wallace L. Chafe 著. III+302 pp. セネカ族はイロコイ族の一族で、もともと現在のニュー・ヨーク州西部に居住していた。
- 186(1963). *AP*. No. 67. 「チプワ族のマットを織る技術 Chippewa mat-weaving techniques」 Karen Daniels Petersen 著. pp. 211-285, pls. 43-60.
- 187(1964). 『イロコイの音楽とダンス—セネカ族ロングハウス 2 軒の儀礼的芸術』 *Iroquois music and dance: Ceremonial arts of two Seneca Longhouses*, Gertrude P. Kurath 著. XVI+268 pp., 3 pls., 164 figs.
- 190(1964). 『ヒューロン族の1615~1649年にかけての民族誌』 *An ethnography of the Huron Indians, 1615-1649*, Elisabeth Tooker 著. IV+183 pp.
- 191(1964). *AP*. No. 74. 「ニュー・ヨーク州セラキュース近郊オノンダガにおけるイロコイのお面とお面製作 Iroquois masks and maskmaking at Onondaga」 Jean Hendry 著. pp. 349-409, pls. 91-104.

C. 考古学

8(1889).『オハイオ州のマウンドの諸問題』*The problem of the Ohio mounds*, Cyrus Thomas 著. 54 pp., 8 figs.

10(1889).『オハイオ州における円形、方形、八角形の土盛り』*The circular, square, and octagonal earthworks of Ohio*, Cyrus Thomas 著. 35 pp., 11 pls., 5 figs. 1889.

D. 形質人類学

62(1916).『アメリカ合衆国東部の先住民族、特にレナベ (デラウェア) 族の形質人類学』*Physical anthropology of the Lenape or Delawares, and of the Eastern Indians in general*, Aleš Hrdlička 著. 130 pp., 29 pls., 1 fig. 1916. レナベ族は「デラウェア同盟」とも呼ばれるように、アルゴンキン諸語を話す諸部族の集合体である。もともと合衆国北東部のニュー・ヨーク州、ニュー・ジャージー州、ペンシルヴァニア州、デラウェア州に居住していたようであるが、白人の侵入に応じて、南部のテキサス州やミズーリ州に移住した。

11. 南東部 Southeast

南東部は、大西洋岸からミシシッピ川とアーカンソー州トリニティ Trinity 川を西端とし、メキシコ湾岸からテネシー川・ポトマック川を北端とする地域である。フロリダ、ジョージア、アラバマ、ルイジアナ、サウス・キャロライナ州のほぼ全域、ミシシッピ、テネシー、ノース・キャロライナ、ヴァージニア州の大半、テキサス、オクラホマ、アーカンソー、イリノイ、ケンタッキー、ウェスト・ヴァージニア、メリーランド州の一部を含む。ミシシッピ川流域は、ミシシッピ文化(10-15世紀)と呼ばれる、マウンド(現在も地表から突出している)を伴う独特の文化が栄え、考古学の調査も盛んな地域である。

A. 言語学

9(1889).『マスコギー諸語関係の文献目録』*Bibliography of the Muskogean languages*, James Constantine Pilling 著. V+114 pp. マスコギー族は、むしろクリーク Creek 族として知られ、マスコギー諸語

族最大の部族のひとつで、一種の同盟を維持していた。ジョージア、アラバマ州に居住する。

46(1915).『チョクトー語辞書』 *A dictionary of the Choctaw language*, Cyrus Byington 著, John R. Swanton・Henry S. Halbert 共編. XI+611 pp., 1 pl. チョクトー語はマスコギー諸語に属し、チョクトー語を話す先住民、チョクトー族は、マスコギー諸語を話す部族の中で最大であり、現在のミシシッピ州中部・南部を中心に、アラバマ州、ジョージア州、ルイジアナ州にも居住していた。

47(1912).『ビロクシ語・オフォ語辞書』 *A dictionary of the Biloxi and Ofo languages, accompanied with thirty-one Biloxi texts and numerous Biloxi phrases*, James Owen Dorsey・John R. Swanton 共著. V+340 pp. ビロクシ語・オフォ語共に南西部ミシシッピ州、ルイジアナ州という、マスコギー諸語が使われた地域で採録された言語であるが、言語学的にはむしろスー諸語族に属し、それらを話す先住民たちも北部から移住してきた。

68(1919).『テュニカ・チティマチャ・アタパカ語の構造的辞書的比較』 *A structural and lexical comparison of the Tunica, Chitimacha, and Atakapa languages*, John R. Swanton 著. 56pp. テュニカ族は、ルイジアナ・アーカンソー・ミシシッピ州のミシシッピ川流域に、チティマチャ族はルイジアナ州のミシシッピ河口の三角州や Grande Lake 海岸域に、アタパカ族はルイジアナ州とテキサス州東部のメキシコ湾岸に、各々居住していた。

108(1932).『アタパカ語辞典』 *A dictionary of the Atakapa language*, 181 pp., 1 pl. さらにテキストが付録として付く。

157(1955). *AP. No. 46. 「ヴァージニア州先住民の言語のものとストラッチャー語彙 The original Strachey vocabulary of the Virginia Indian language」* John P. Harrington 著. pp. 189-202.

B. 民族学・民族音楽学

17(1894).『ヴァージニア州のパムンキー・インディアン』 *The Pamunkey Indians of Virginia*, Jno. Garland Pollard 著. 19 pp. パムンキー・インディアンはヴァージニア州に現在でも居住している、アルゴンキン

族の一部である。

- 43(1911). 『ミシシッピ川下流と隣接するメキシコ湾岸の先住民の部族』
Indian tribes of the lower Mississippi Valley and adjacent coast of the Gulf of Mexico, John R. Swanton 著. VII+387 pp., 32 pls. (地図1葉を含む), 2 figs.
- 48(1909). 『ルイジアナ州セント・タマニー・パリッシュ、ベイヨー・レイコムにおけるチョクトー族』 *The Choctaw of Bayou Lacomb, St. Tammany Parish, Louisiana*, David Ives Bushnell, Jr. 著. IX+37 pp., 22 pls., 1 fig.
- 73(1922). 『クリーク族とその隣人たちの初期の歴史』 *Early history of the Creek Indians and their neighbors*, John R. Swanton 著. 492 pp., 10 pls. (すべて別添の地図).
- 88(1929). 『南東部先住民の神話・民話』 *Myths and tales of the Southeastern Indians*, John R. Swanton 著. X+275 pp.
- 99(1932). 『スウィマー原稿—チェロキー族の神聖な処方と診断書』 *The Swimmer manuscript: Cherokee sacred formulas and medicinal prescriptions*, James Mooney 編 (さらに Frans M. Olbrechts により修正・編集). XVII+319 pp., 13 pls. チェロキー族はアメリカ合衆国南東部に広く居住していた。具体的には、現在のノース・キャロライナ州西部、ヴァージニア州とウェスト・ヴァージニア州の西部、テネシー州東部、サウス・キャロライナ州、ジョージア州、アラバマ州北部まで含まれる。イロコイ諸語を話す部族で、一番南部に居住するグループである。
- 103(1931). 『チョクトー族の社会的儀礼的生活に関する史料』 *Source material for the social and ceremonial life of the Choctaw Indians*, John R. Swanton 著. VII+282 pp., 6 pls., 1 fig.
- 123(1939). *AP*, No. 10. 「クリーク族に関する覚書 Notes on the Creek Indians」 J. N. B. Hewitt 著, John R. Swanton 編集. pp. 119-159.
- 133(1943). *AP*, No. 19. 「ルイジアナ州チティマチャ族の歌を探して A Search for songs among the Chitimacha Indians in Louisiana」 Frances Densmore 著. pp. 1-15, pls. 1-4.

- 133(1943). *AP*, No. 23. 「東部チェロキー族 The Eastern Cherokees」
William Harlen Gilbert, Jr. 著. pp. 169-413, pls. 13-17.
- 136(1943). *AP*, No. 28. 「チョクトー族の音楽 Choctaw music」 Frances
Densmore 著. pp. 101-188, pls. 10-21, 歌65曲.
- 137(1946). 『アメリカ合衆国南東部の先住民族』 *The Indians of the
Southeastern United States*, John R. Swanton 著. XIII+943 pp., 107
pls., 5 figs., 13 maps.
- 151(1953). *AP*, No. 35. 「フロリダのセミノール族の医療・医薬の束と
グリーン・コーン・ダンス The medicine bundles of the Florida
Seminole and the Green Corn Dance」 Louis Capron 著. pp. 155-210,
pls. 7-15. セミノール族はアメリカ合衆国南東部の南部、現在のフロ
リダ州などに居住する。
- 161(1956). 『セミノール族の音楽』 *Seminole music*, Frances Densmore
著. XXVIII+224 pp., 18 pls., 1 fig., 243の楽譜.
- 164(1957). *AP*. No. 52. 「東部スー族の問題の再評価—特にオッカニー
チ、サポニ、トュテロといったヴァージニア州の諸部族を中心として
Revaluation of the Eastern Siouan problem, with particular empha-
sis on the Virginia branches—the Occaneechi, the Saponi, and the
Tutelo」 Carl F. Miller 著. pp. 115-212.
- 180(1961). 『チェロキー、イロコイ文化に関するシンポジウム』 *Sympo-
sium on Cherokee and Iroquois culture*, William N. Fenton・John
Gulick 共編. VI+292 pp. 25節から成り、序論を除く個々の節の内容
(括弧内に執筆者名) は次の通り。「イロコイ・チェロキーの言語学的
関係」(Floyd G. Lounsbury)、「Lounsbury 論文へのコメント」
(Mary R. Haas)、「イロコイ考古学と集落パターン」(William A.
Ritchie)、「Ritchie 論文へのコメント、その1」(William H.
Sears)、「Ritchie 論文へのコメント、その2」(Douglas S. Byers)、
「チェロキー考古学」(Joffre L. Coe)、「Coe 論文へのコメント」
(Charles H. Fairbanks)、「ウッドランド東部の共同体の型式分類と
文化化」(John Witthoft)、「Witthoft 論文へのコメント」(John M.
Goggin)、「ガドゥギ Gadugi と呼ばれる、チェロキーの経済協同組

- 合」(Raymond D. Fogelson・Paul Kutsche)、「チェロキー国家の形成」(Fred O. Gearing)、「Gearing 論文のコメント」(Annemarie Shimony)、「ハンサム・レーク地域の文化構成」(Anthony F. C. Wallace)、「Wallace 論文のコメント」(Wallace L. Chafe)、「レッドバード・スミス Redbird Smith 運動」(Robert K. Thomas)、「Thomas 論文へのコメント」(Fred W. Voget)、「チェロキー・イロコイの儀礼性、音楽、ダンスへの環境の影響」(Gertrude P. Kurath)、「Kurath 論文へのコメント」(Willan C. Sturtevant)、「イロコイの占い師とその保守的影響」(Annemarie Shimony)、「チェロキーの医学的・呪術的信仰の変化、持続性、そして適応」(Raymond D. Fogelson)、「チェロキーのパersonality 特性の持続性に関する若干の観察」(Charles H. Holzinger)、「Holzinger 論文へのコメント、その 1」(David Landy)、「Holzinger 論文へのコメント、その 2」(John Gulick)、「イロコイ文化史—一般的評価」(Willam N. Fenton)
- 191(1964). *AP*. No. 70. 「アパラチア北部地方の古代部族に関する若干の観察 Observations on certain ancient tribes of the Northern Appalachian Province」Bernard G. Hoffman 著. pp. 191-245, pl. 26. なお、対象地域は北東部の南部も含む。
- 196(1966). *AP*. No. 75. 「ウォルフタウンの年代記—ノース・キャロライナ州のチェロキー族の1850-1862年の社会資料 Chronicles of Wolf-town: Social documents of the North Carolina Cherokees, 1850-1862」Anna Gritts Kilpatrick・Jack Frederick Kilpatrick 共著. pp. 1-111.
- 196(1966). *AP*. No. 77. 「ワハネナウヒ原稿—チェロキー族の歴史的概要—習慣、伝統、迷信 The Wahnenuhi manuscript: Historical sketches of the Cheokees, together with some of their customs, traditions, and superstitions」Jack Frederick Kilpatrick による紹介と編集. pp. 175-213, pls. 1-4.
- 196(1966). *AP*. No. 78. 「“Principal People” (主要な人々) 1960年—東部チェロキー族の文化的・社会的集団の研究 The “Principal People,” 1960: A study of cultural and social groups of the eastern

Cherokee] Harriet Jane Kupferer 著. pp. 215-325.

196(1966). *AP*. No. 80. 「東部チェロキー族の民話—フラン＝M＝オルブレヒツが残したフィールド・ノートに基づく再現 Eastern Cherokee folktales: Reconstructed from the field notes of Frans M. Olbrechts」 Jack Frederick Kilpatrick・Anna Gritts Kilpatrick 共著. pp. 379-447.

C. 考古学

23(1894 [1895]). 『ヴァージニア州ポトマック川ジェームズ川峡谷地域の考古学調査』 *Archeological investigations in James and Potomac Valleys*, Gerard Fowke 著. 80 pp., 17 figs.

69(1919). 『ミシシッピ川以東の先住民の村や村落遺跡』 *Native villages and village sites east of the Mississippi*, David I. Bushnell, Jr. 著. 111 pp., 17 pls., 12 figs.

71(1920). 『ミシシッピ川以東の先住民の集団墓遺跡や埋葬形態』 *Native cemeteries and forms of burial east of the Mississippi*, David I. Bushnell, Jr. 著. 160 pp., 17 pls., 17 figs.

113(1936). 『ルイジアナ州カタホウラ・パリッシュのトロイヴィル・マウンド群』 *The Troyville mounds, Catahoula Parish, La.*, Winslow M. Walker 著. VII+73 pp., 16 pls., 15 figs.

118(1938). 『テネシー州東部ノリス盆地の考古学的踏査』 *An archaeological survey of the Norris Basin in eastern Tennessee*, William S. Webb 著. XV+398 pp., 152 pls., 2 maps, 79 figs.

119(1938). *AP*, No. 1. 「ジョージア州メイコン Macon での考古学踏査の概要報告 A preliminary report on archeological explorations at Macon, Ga.」 A. R. Kelly 著. pp. 1-68, pls. 1-12.

122(1939). 『アラバマ州北部のテネシー川のウィーラー盆地における考古学的踏査』 *An archaeological survey of Wheeler Basin on the Tennessee River in northern Alabama*, William S. Webb 著. XV+214 pp., 122 pls., 2 maps, 25 figs.

129(1942). 『アラバマ・ミシシッピ・テネシー州に隣接するピクウィック盆地の考古学的踏査』 *An archeological survey of Pickwick Basin in*

- the adjacent portions of the States of Alabama, Mississippi, and Tennessee.* William S. Webb・David L. DeJarnett 共著。さらに以下の附編が収められている：「ピクウィック盆地の地質学」(Walter B. Jones)、「同盆地の貝塚で発見される二枚貝の概要報告」(J. P. E. Morrison)、「同盆地の人骨の概要報告」(Charles E. Snow)、「ピクウィック土器の記述と分析」(William G. Haag) XXII+536 pp., 316 pls., 2 maps, 99 figs.
- 131(1941). 『ノース・キャロライナ州チェロキー郡ピーチトゥリー・マウンドと村落遺跡』 *Peachtree Mound and village site, Cherokee County, North Carolina*, Frank M. Setzler・Jesse D. Jennings 共著。T. D. Stewart によるピーチトゥリー遺跡出土の人骨の報告も附載。IX+103 pp., 50 pls., 12 figs.
- 133(1943). *AP*, No. 21. 「サウス・キャロライナ州ビューフォート郡の幾つかの遺跡に関する覚書 Some notes on a few sites in Beaufort County, South Carolina」 Regina Flannery 著。pp. 143-153.
- 133(1943). *AP*, No. 22. 「サウス・キャロライナ州ビューフォート付近の2箇所の遺跡から出土した土器の分析と解釈 An analysis and interpretation of the ceramic remains from two sites near Beaufort, South Carolina」 James B. Griffin 著。pp. 155-168, pls. 10-12.
- 151(1953). *AP*, No. 40. 「ウェスト・ヴァージニア州ネイトリムにおけるアデナ文化のマウンドの探検 Exploration of an Adena Mound at Natrium, West Virginia」 Ralph S. Solecki 著。pp. 313-395, pls. 24-29.
- 160(1955). 『ヴァージニア州考古学における土器研究』 *A ceramic study of Virginia archeology*, Clifford Evans 著。C. G. Holland による尖頭器と大型の石刃の分析も附載。VIII+195 pp., 30 pls., 23 figs.
- 164(1957). *AP*. No. 49. 「フロリダ州中東部におけるオーモンド・ビーチ・マウンド The Ormond Beach Mound, East Central Florida」 Jesse D. Jennings・Gordon R. Willey・Marshall T. Newman 共著。pp. V-X+1-28, pls. 1-12.
- 173(1960). *AP*. No. 57. 「ヴァージニア州北西部の先土器・土器文化の

パターン Preceramic and ceramic cultural patterns in northwest Virginia] C. G. Holland 著. pp. 1-129.

12. 北アメリカ全体、あるいは複数地域を対象とするもの

A. 総合人類学

30(第1部1907; 第2部1910). 『メキシコ以北アメリカ先住民族百科全書』 *Handbook of American Indians north of Mexico*, Frederick Webb Hodge 編. 第1部, IX+972 pp., many figures, map. 第2部, IV+1221 pp., many figures. スミソニアン研究所による *Handbook* 『百科全書』刊行の伝統の先駆けとなった記念碑的出版物で、単一の号を名乗るが、2巻セットで合計2,200ページを誇る。1959年にニュー・ヨークの Pageant Book Co.、1969年に Greenwood Press から復刻版が出たということは、20世紀初頭に出版された本書が今日でも参考書としての役割を十分果たしているということである。辞書・百科事典形式をとり、考古学・民族学・言語学・形質人類学を含んだ内容は極めて網羅的で、先住民の集落の名称から、漁業や道具にまで及ぶ。

B. 言語学

40(第1部1911; 第2部1922). 『アメリカ先住民族諸語百科全書』 *Handbook of American Indian languages*, Franz Boas 編. 第1部, VII+1069 pp. 第2部, V+903 pp. 以下に、言語(担当著者)の順で内容を示す。

第1部: 序論(Franz Boas); アサパスカン諸語(Pliny Earle Goddard); トリンギット・ハイダ(John R. Swanton); チムシアン・クワキユートル Kwakiutl・チヌック(Franz Boas); マイドゥ Maidu (Roland B. Dixon); アルゴンキン(特にフォックス方言)(William Jones・Truman Michelson 修訂); スー(Franz Boas・John R. Swanton 共著); イヌイト諸語(William Thalbitzer)

第2部: タケルマ Takelma (Edward Sapir); クース Coos (Leo J.

Frachtenberg); シウスラウ諸語 Siuslaw (Leo J. Frachtenberg); チュクチー-Chukchee (Waldemar Bogoras)

初出の先住民諸語が使われた地域は次の通り：クワキユートル（ワカシャン諸語）（ブリティッシュ・コロンビア州太平洋岸）；マイドゥ（カリフォルニア州北部）；タケルマ（オレゴン州の Grants Pass 周辺と Jacksonville 周辺）；コース（オレゴン州太平洋岸の Coos 河口と Coquille 河口の間）；シウスラウ（オレゴン州太平洋岸 Florence 周辺）

なお、この『アメリカ先住民民族諸語百科全書』の第3部が、ポアズ編集により、このシリーズではなく、ニュー・ヨークの J. J. Augustin 社より1933-38年に刊行された。

C. 民族学・民族音楽学

128(1941). *AP*, No. 13. 「南北両アメリカ大陸先住民による宝石や装飾用貴石の採掘 The mining of gems and ornamental stones by American Indians」 Sydney H. Ball 著. pp. IX-XII+1-77, pls. 1-5.

145(1952). 『北アメリカの先住民部族』 *The Indian tribes of North America*, John R. Swanton 著. VI+726 pp. 5 maps.

151(1953). *AP*, No. 36. 「アメリカ先住民の音楽のテクニク Technique in the music of the American Indian」 Frances Densmore 著. pp. 213-216.

151(1953). *AP*, No. 37. 「歌と超自然現象とのつながりに関する先住民の信仰 The belief of the Indian in a connection between song and the supernatural」 Frances Densmore 著. pp.217-223.

152(1954). 『ヘンリー＝スクールクラフト Henry Rowe Schoolcraft 著 「アメリカ合衆国の先住民部族」 索引』 *Index to Schoolcraft's "Indian tribes of the United States,"* Frances S. Nichols 編集. VI+257 pp. 19世紀半ばはアメリカ先住民への差別的意識から、マウンドは彼ら先住民の祖先たちの文化の所産とは認めず、マウンドビルダー—mound builders という未知の民族が築造したものという俗説が主流であったが、スクールクラフトはマウンドビルダー説に反対した初期の研究者の一人である（本稿19章サイラス＝トーマスの項を参照）。スクール

クラフトの著書は、正確には *Historical and Statistical Information Respecting the History, Condition, and Prospects of the Indian Tribes of the United States* と題され、全6巻、1851年から1857年にかけて出版され、スクールクラフトの重要な意見も開陳されているのに、まとまりのあまりない膨大な著作のため、読む人はほとんどいなかった。

D. 考古学

- 4(1887). 『アメリカ民族学局によるマウンド調査』 *Work in mound exploration of the Bureau of Ethnology*, Cyrus Thomas 著, 15 pp., 1 fig.
- 12(1891). 『ロッキー山脈以東先史時代工芸のカタログ』 *Catalogue of prehistoric works east of the Rocky Mountains*, Cyrus Thomas 著. 246 pp., 17 pls. (すべて地図).
- 60(1919). 『先住民族古代遺物百科全書』 *Handbook of aboriginal American antiquities*. 第1部：序章(石器とその製作技術) W. H. Holmes 著. XVII+380 pp., 223 figs.
- 76(1922). 『考古学的調査』 *Archeological investigations*. Gerald Fowke 著. 204 pp., 45 pls., 37 figs. 5つの相互に関係ない独立した章からなる。内容は次の通り。1) ミズーリ州中部のオザーク Ozark 地域の洞穴遺跡；2) その他の州における洞穴遺跡；3) カンザス州・ネブラスカ州内のミズーリ川沿いの崖の調査；4) 先住民の住居基壇となったマウンド；5) ハワイにおける考古学調査

E. 形質人類学

- 33(1907). 『北アメリカの初期人類の可能性のある人骨』 *Skeletal remains suggesting or attributed to early man in North America*, Aleš Hrdlička 著. 113 pp., 21 pls., 16 figs.
- 42(1909). 『アメリカ合衆国のある先住民部族における結核』 *Tuberculosis among certain Indian tribes of the United States*, Aleš Hrdlička 著. VII+48 pp., 22 pls.
- 66(1918). 『アメリカ大陸における初期人類と考え得る最近の発見』 *Recent discoveries attributed to early man in America*, Aleš Hrdlička 著. 67 pp., 14 pls., 8 figs.

13. メソアメリカ

メソアメリカは現在のメキシコ合衆国の大半とベリーズ（旧イギリス領ホンジュラス）からなる地域である。オルメカ、マヤ、アステカ文明が栄え、考古学的に著名である。したがって、この対象地域も考古学の文献が大半を占める。この傾向は *Handbook of Middle American Indians* 全16巻（University of Texas Press, 1964-76）でも顕著である。ただ、考古学・民族学・言語学（マヤ文字）が一体となって研究されており、以下の分野別の分類には無理があることも承知してほしい。

A. 言語学

- 44(1911). 『メキシコ・中央アメリカ先住民族諸語とその地理的分布』 *Indian languages of Mexico and Central America, and their geographical distribution*, Cyrus Thomas 著, John R. Swanton 補助. VII+108 pp., 言語の分布を示す地図1葉.

B. 民族学

- 64(1918). 『ユカタン南部とベリーズ北部のマヤ民族』 *The Maya Indians of southern Yucatan and northern British Honduras*, Thomas W. F. Gann 著. 146 pp., 28 pls., 84 figs.
- 123(1939). *AP*, No. 9. 「セデルマイヤーによる1746年のメキシコ・シティー事物記 Sedelmayr's *Relacion of 1746*」 Ronald L. Ives 英訳編集. pp. 97-117.
- 136(1943). *AP*, No. 29. 「ユカタン半島の100の植物に関する民族学的データ Some ethnological data concerning one hundred Yucatan plants」 Morris Steggerda 著. pp. 189-226, pls. 22-24.
- 136(1943). *AP*, No. 30. 「メキシコ ユカタン半島の30の町に関する記述 A description of thirty towns in Yucatan, Mexico」 Morris Steggerda 著. pp. 227-248, pls. 25-28.
- 173(1960). *AP*. No. 59. 「メキシコ ミチョアカン地域のパツクアロ湖域の槍投げ器の使用 The use of the atlatl on Lake Patzcuaro, Michoacan」 M. W. Stirling 著. pp. 261-268, pls. 39-41.
- 186(1963). *AP*. No. 65. 「メキシコ合衆国北西部ソノラ・チワワ地域の

ワリオ族の民族誌概要 The Warihio Indians of Sonora-Chihuahua: An ethnographic survey] Toward Scott Gentry 著. pp. 61-144, pls. 28-38.

C. 考古学

18(1894). 『マヤの一年』 *The Maya year*, Cyrus Thomas 著. 64 pp., 1 pl.

28(1904). 『メキシコと中央アメリカの古代遺物、カレンダー・システム、歴史—E=セレル、E=フォルテスマン、P=シェルハス、C=サツペル、E=P=ディーゼルドルフによる24の論考』 *Mexican and Central American antiquities, calendar systems, and history: Twenty-four papers by Eduard Seher, E. Forstemann, Paul Schellhas, Carl Sapper, and E. P. Dieseldorff*. Charles P. Bowditch 監修によるドイツ語からの英訳. 682 pp., 49 pls., 134 figs.

57(1915). 『マヤ絵文字研究入門』 *An introduction to the study of the Maya hieroglyphs*, Sylvanus Griswold Morley 著. XVI+284 pp., 32 pls., 85 figs.

74(1921). 『メキシコ合衆国サンチャゴ・アウイソトラの遺跡発掘調査』 *Excavation of a site at Santiago Ahuitzotla, D. F. Mexico*, Alfred M. Tozzer 著. 56 pp., 19 pls., 9 figs. この調査は、テオティワカン以外の、メキシコ盆地内での後古典期の集落の最初の発掘例となった。

123(1939). AP, No. 7. 「イギリス領ホンジュラス コロサル地区の考古学調査 Archeological investigations in the Corozal District of British Honduras」 Thomas・Mary Gann 夫妻共著. VII-VIII+1-66, pls. 1-10.

138(1943 [1944]). 『メキシコ南部の石造記念碑』 *Stone monuments of southern Mexico*, Matthew W. Stirling 著. VII+84 pp., 62 pls., 14 figs.

139(1943). 『メキシコ ヴェラクルーズのトレス・サポーテス出土土器概説』 *An introduction to the ceramics of Tres Zapotes, Veracruz, Mexico*, C. W. Weiant 著. XIV+144 pp., 78 pls., 54 figs., 10maps. トレス・サポーテス遺跡は、オルメカ文化で最初に調査された遺跡であ

- る。ヴェラクルス州南部に位置し、オルメカ文化、続オルメカ文化、古典期ヴェラクルス文化の中心地として栄えた。居住は形成期に始まり(1500-900B.C.)、後古典期(A.D.900-1200)まで続いた。
- 140(1943).『メキシコ ヴェラクルズのトレス・サポテス出土土器編年』*Ceramic sequences at Tres Zapotes, Veracruz, Mexico*, Philip Drucker 著. IX+155 pp., 65 pls., 46 figs.
- 141(1943 [1944]).『メキシコ ヴェラクルスのセロ・デ・ラ・メサス遺跡の土器と層位学』*Ceramic stratigraphy at Cerro de las Mesas, Veracruz, Mexico*, Philip Drucker 著. VIII+95 pp., 58 pls., 210 figs. セロ・デ・ラ・メサス遺跡はヴェラクルス州中南部の最大級の遺跡で、600B.C.から A.D.900まで人が居住しており、A.D.300から600までは、地域の首都として栄えた。
- 151(1953). *AP*, No. 34. 「マヤ芸術におけるスイレン—証拠もなく申し立てられたアジア起源 The water lily in Maya art: a complex of alleged Asiatic origin」 Robert L. Rands 著. pp. 75-153.
- 153(1952).『タバスコ州ラ・ヴェンタ遺跡—オルメカ土器と芸術の研究』*La Venta, Tabasco: A study of Olmec ceramics and art*, Philip Drucker 著. Waldo Wedel による1943年の構造的調査の報告の1章と、Anna O. Shepard による土器製作技術に関する分析結果を附載 X+257 pp., 66 pls., 64 figs. ラ・ヴェンタ遺跡は現在のメキシコ合衆国南東部タバスコ州の北西隅に位置する、オルメカ文明の大遺跡である。その面積は20haとも言われ、オルメカ文明に特徴的な巨大な記念碑的の石像物が多数出土した。またその年代も紀元前1千年紀に遡り、他のメソアメリカの古典期よりも早い時期に、巨石建造物・石像物が出現している。
- 157(1955). *AP*. No. 43. 「メキシコ ヴェラクルズ州チキーイト川における石造記念碑 Stone monuments of the Rio Chiquito, Veracruz, Mexico」 Matthew W. Stirling 著. pp.1-23, pls. 1-26.
- 157(1955). *AP*. No. 44. 「メキシコ ヴェラクルズのセロ・デ・ラ・メサス遺跡での碧玉その他の供え物 The Cerro de las Mesas offering of jade and other materials」 Philip Drucker 著. pp. 25-68, pls. 27-54.

- 157(1955). *AP*. No. 48. 「メソアメリカ芸術における水の表現方法 Some manifestations of water in Mesoamerican art」 Robert L. Rands 著. pp. 265-393, pls. 72-76.
- 164(1957). *AP*. No. 53. 「メキシコ南東部の考古学的踏査 An archeological reconnaissance in Southeastern Mexico」 Matthew W. Stirling 著. pp. 213-240, pls. 46-73.
- 164(1957). *AP*. No. 54. 「バリャドリード・マヤの計算 Valladolid Maya enumeration」 John P. Harrington. pp. 241-278.
- 170(1959). 『タバスコ州ラ・ヴェンタ遺跡1955年の発掘調査』 *Excavations at La Venta, Tabasco, 1955*, Philip Drucker・Robert F. Heizer・Robert J. Squier 共著. Jonas E. Gullberg・Garniss H. Curtis・A. Starker Leopold らによる付録. VIII+312 pp., 63 pls., 82 figs.

14. 中央アメリカ・カリブ海沿岸地域

この地域は、後述する紀要143号『南アメリカ大陸先住民族百科全書』では南アメリカに含まれているが、本稿では独立させた。中央アメリカとは、現在のパナマ、ホンジュラス、ニカラグアを指し、メソアメリカ地域とは地理的・文化的に区別される。

A. 言語学

- 162(1956). 『グアイミ語文法と辞書——一部民族学的知見を含む』 *Guaymí grammar and dictionary, with some ethnological notes*, Ephraim S. Alphonse 著. IX+128 pp. グアイミ語はパナマ、コスタリカで使われていた。

B. 民族学

- 106(1932). 『ホンジュラス・ニカラグアのミスキート族及びスム族の民族誌概要』 *Ethnographical survey of the Miskito and Sumu Indians of Honduras and Nicaragua*, Eduard Conzemius 著. VII+191 pp., 10 pls., 1 fig.
- 119(1938). *AP*, No. 3. 「ドミニカのカリブ族 The Caribs of Dominica」 Douglas Taylor 著. pp. 103-159, pls. 13-18.

C. 考古学

- 3(1887). 『ダリエン地峡チリキの古代先住民による金やその他金属の使用』 *The use of gold and other metals among the ancient inhabitants of Chiriqui, Isthmus of Darien*, William H. Holmes 著. 27 pp., 22 figs.
- 191(1964). *AP*. No. 68. 「パナマのヴィエホの先史時代 The prehistory of Panama Viejo」 Leo P. Biese 著. pp. 1-51, pls. 1-25.
- 191(1964). *AP*. No. 71. 「エル・リモン—パナマ コクル県の初期埋葬遺跡 EI Limon, an early tomb site in Coclé Province, Panama」 Matthew W. ・ Marion Stirling 夫妻共著. pp. 247-254, pl. 27.
- 191(1964). *AP*. No. 72. 「パナマ ボカス・デル・トロのアルミランテ湾の考古学に関する覚書 Archeological notes on Almirante Bay, Bocas del Toro, Panama」 Matthew W. ・ Marion Stirling 夫妻共著. pp. 255-284, pls. 28-44.
- 191(1964). *AP*. No. 73. 「パナマのタボーガ、ウラバ、タボギーヤ島の考古学 The archeology of Taboga, Uraba, and Taboguilla Islands, Panama」 Matthew W. ・ Marion Stirling 夫妻共著. pp. 285-348, pls. 45-90.
- 193(1964). 『パナマのパリタとサンタ・マリア地域の考古学調査』 *Archeological investigations in the Parita and Santa Maria zones of Panama*, John Ladd 著. XII+291 pp., 25 pls., 68 figs., 2 maps, 14 charts.

15. 南アメリカ大陸 (紀要143号『南アメリカ大陸先住民族百科全書』は次章で扱う)

A. 民族学

- 63(1917). 『ティエラ・デル・フエゴと隣接する地域の諸部族の分析的・批判的文献目録』 *Analytical and critical bibliography of the tribes of Tierra del Fuego and adjacent territory*, John M. Cooper 著. IX+233 pp., 1 pl. (map). ティエラ・デル・フエゴは南米チリの南端

地域である。

- 79(1923). 『エクアドル東部のヒバロ族の間での血の復讐、戦争、そして勝利の祭り』 *Blood revenge, war, and victory feasts among the Jibaro Indians of Eastern Ecuador*, Rafael Karsten 著. VII+94 pp., 10 pls. ヒバロ族はエクアドル東部の赤道付近に居住していた。
- 91(1923). 『ガイアナ、特にイギリス領ガイアナ南部の先住民の芸術・工芸・習慣に関する研究』 *Additional studies of the arts, crafts, and customs of the Guiana Indians, with special reference to those of southern British Guiana*, Walter E. Roth 著. XVII+110 pp., 34 pls. 90 figs. イギリス領ガイアナは現在のガイアナ（南アメリカ北東部）
- 117(1938). 『ヒバロ族の歴史・民族誌資料』 *Historical and ethnographical material on the Jivaro Indians*, M. W. Stirling 著. XI+148 pp., 37 pls., 1 map, 6 figs.
- 123(1939). *AP*, No. 11. 「ヴェネズエラ、カパナパロ川のヤルロ族 The Yaruros of the Capanaparo River, Venezuela」 Vincenzo Petruccio 著. pp. 161-290, pls. 11-25.
- 128(1941). *AP*, No. 16. 「エクアドルのインバブラ地方のケチュア語を話す先住民とアンデス地域で現在居住する人々との人類形態学的関係 The Quichua-speaking Indians of the Province of Imbabura (Ecuador) and their anthropometric relations with the living populations of the Andean area」 John Gillin 著. pp. 167-228, pls. 19-29.
- 134(1942). 『ボリヴィア東部とマット・グロッソ西部の先住民部族』 *The native tribes of eastern Bolivia and western Matto Grosso*, Alfred Mettraux 著. IX+182 pp., 5 pls., 1 fig.

B. 考古学

- 7(1889). 『ペルー古代の織物』 *Textile fabrics of ancient Peru*, William H. Holmes 著, 17 pp., 11 figs.
- 123(1939). *AP*, No. 12. 「ヴェネズエラ、アラウキンの考古学 Archeology of Arauquin」 Vincenzo Petruccio 著. pp. 291-295, pls. 26-32.
- 133(1943). *AP*, No. 26. 「キープとアンデス文明 The quipu and Peruvian civilization」 John R. Swanton 著. pp. 587-596.

- 155(1953). 『ペルー、ヴィルー峡谷における先史時代集落パターン』 *Pre-historic settlement patterns in the Viru Valley, Peru*, Gordon R. Willey 著. XXII+453 pp., 60. pls., 88 figs. 本書の内容と重要性は「故杉原荘介教授旧蔵欧文考古学書」『図書の譜』第11号で紹介した。
- 167(1957). 『アマゾン川河口での考古学調査』 *Archeological investigations at the mouth of the Amazon*, Betty J. Meggers・Clifford Evans 共著. XXVIII+664 pp., 112 pls., 206 figs., 71 tables.
- 177(1960). 『南アメリカ イギリス領ガイアナにおける考古学調査』 *Archeological investigations in British Guiana, South America*, Clifford Evans・Betty J. Meggers 共著. XXI+418 pp., 68 pls., 127 figs.
- 186(1963). AP. No. 63. 「タルキーエクアドル マナビ県の初期遺跡 Tarqui, an early site in Manabi Province, Ecuador」 Matthew W.・Mariort Stirling 夫妻共著. pp. 1-28, pls. 1-19.
- C. 形質人類学
- 52(1912). 『南アメリカ大陸の初期人類』 *Early man in South America*, Aleš Hrdlička 筆頭筆者、William H. Holmes・Bailey Willis・Fred. Eugene Wright・Clarence N. Fenner 調査・執筆補助. XV+405 pp., 68 pls., 51 figs.

16. 『南アメリカ大陸先住民族百科全書 *Handbook of South American Indians*』

ジュリアン＝スチュワード総編集. ゴードン＝ウィリー・アルフレッド＝メトロ＝編集補佐. 全7巻.

第1巻(1946). 辺境の諸部族. 総 XIX+624頁, 図版112, 挿図69, 地図7.

百科全書への序論：その目的・対象範囲 (Julian H. Steward). pp. 1-9

第1部 南アメリカ大陸南部の先住民族 pp. 11-196; pls. 1-44.

南部の狩猟民 (John M. Cooper); パタゴニア Patagonia 地域の考古学 (Junius Bird); グレーター・パンパ Greater Pampa 地域の考古学 (Gordon R. Willey); チョノ Chono 族 (John M. Cooper); ア

ラカルフ Alacaluf 族(Junius Bird);シャガン Yahgan 族(John M. Cooper);オナ Ona 族(John M. Cooper);パタゴニアとパンパの狩猟民(John M. Cooper);ウアルペ Huarpe 族(Salvador Canals Frau);パラナ・デルタ Parana Delta とラ・プラタ・リットラル La Plata Littoral の先住民(S. K. Lothrop);チャルーア Charrua 族(Antonio Serrano)

第2部 グラン・チャコ Gran Chaco の先住民族 pp. 197-380; pls. 45-76.

チャコ Chaco 族の民族誌(Alfred Metraux この項だけで pp. 197-370); グラン・チャコの今日の先住民族(Juan Belaieff)

第3部 ブラジル東部の先住民族 pp. 381-574; pls. 77-104

序論(Robert H. Lowie);ラゴア・サンタ Lagoa Santa 化石人骨(Annibal Mattos);ブラジル沿岸地域の貝塚(sambaquis)(Antonio Serrano);グアト Guato 族(Alfred Metraux);ボロロ Bororo 族(Robert H. Lowie);グアヤキ Guayaki 族(Alfred Metraux・Herbert Baldus);カインガン Caingang 族(Alfred Metraux);北西部と中央部ゲ Ge 族(Robert H. Lowie);南部カヤポ Cayapo 族(Robert H. Lowie);グアイタカ Guaitaca 族(Alfred Metraux);プリ・コロアド Puri-Coroado 語族(Alfred Metraux);ボトクド Botocudo 族(Alfred Metraux);マシャカリ Mashacali、パタショ Patasho、マラリ Malali 語諸族(Alfred Metraux);カマカン Camacan 語諸族(Alfred Metraux・Curt Nimuendaju);所謂「タブヤ”Tapuya”」族(Robert H. Lowie);カリリ Cariri 族(Robert H. Lowie);パンカラル Pancararu 族(Robert H. Lowie);タライリウ Tarairiu 族(Robert H. Lowie);ジェイコ Jeico 族(Robert H. Lowie);グック Guck 族(Robert H. Lowie);フルニオ Fulnio 族(Alfred Metraux);テレメンベ Teremembe 族(Alfred Metraux)

関連図版105-112; 第1巻の引用文献目録 pp. 575-624.

第2巻(1946). アンデス文明. 総 XXXIV+1035頁, 図版192, 挿図100, 地図

11.

前書き (Julian H. Steward). pp. XXV-XXXI. Map. 1.

第1部. アンデス高地：序論 by Wendell C. Bennett. pp. 1-60, pls.1-16.

第2部. アンデス中部

アンデス中部の考古学(Wendell C. Bennett);ペルー北部海岸域の文化の段階(Rafael Larco Hoyle);クスコ Cuzco の考古学(Luis E. Valcarcel);スペイン征服時のインカ文化(John Howland Rowe);植民地世界におけるケチュア語(George Kubler);現在のケチュア語(Bernard Mishkin);アンデスの暦(Luis E. Valcarcel);ペルーにおける先住民の市場と催しもの(Luis E. Valcarcel);ペルー中部の共同体の社会と経済・政治的進化(Hildebrando Castro Pozo);アイマラ Aymara 族(Harry Tschopik, Jr.);ウル・チパヤ Uru-Chipaya 族(Weston La Barre)

第3部. アンデス南部

チリ北部海岸域の文化の段階(Junius B. Bird);チリ北部海岸域の歴史時代の居住者たち(Junius B. Bird);アタカメノ Atacameno 族(Wendell C. Bennett);アルゼンチン北西隅のプナ Puna 族とケブラダ Quebrada 族の文化(Eduardo Casanova);チリ地域のディアギタ Diaguita 族(Samuel K. Lothrop);アルゼンチン地域のディアギタ族(Fernando Marquez Miranda);チャコ・サンチアゲーニョ Chaco-Santiagueno 文化(Fernando Marquez Miranda);ラ・カンデラリア La Candelaria の文化(Gordon R. Willey);シエラ・デ・コルドバ Sierras de Cordoba のコメチンゴン Comechingon 族とその近隣諸部族たち(Francisco de Aparicio);アラウカニアン Araucanians 族(John M. Cooper);アラウカニアン族のアルゼンチン地域への拡大(Salvador Canals Frau)

第4部. アンデス北部 pp. 767-974, pls. 157-192, figs. 86-100.

エクアドルの考古学(Donald Collier);エクアドルの歴史時代諸部族(John Murra);コロンビアの考古学(Wendell C. Bennett);コロンビアのサン・アグスティン San Agustin とティエラデントロ Tierradentro の考古学(Gregorio Hernandez de Alba);コロンビ

アのパパヤン Popayan 地域の考古学(Henri Lehmann);コロンビアのシエラ・ネヴァダ・デ・サンタ・マルタ Sierra Nevada de Santa Malta の諸部族(Willard Z. Park);チブチャChibcha族(A. L. Kroeber);コロンビア南西部の先住民諸部族と諸語(Sergio Elias Ortiz);コロンビア南部の高地諸部族(Gregorio Hernandez de Alba);近代のキリヤシंगा Quillacinga、パスト Pasto、コアイケル Coaiquer (Sergio Elias Ortiz);モゲックス・ココヌコ (Mogux-Coconuco)族(Henri Lehmann)

用語解説 pp. 975-978.

第2巻の引用文献目録 pp. 979-1035.

第3巻(1948). 熱帯雨林の諸部族. 総 XXVI+986頁, 図版126, 挿図134, 地図8.

前書き (Julian H. Steward) pp. XXI-XXIV. 地図1.

熱帯雨林：序論(Robert H. Lowie) pp. 1-56, pls. 1-8, figs. 1-2.

第1部. 海岸地域・アマゾン川流域のテュピ Tupi pp. 57-348, pls. 9-34, figs. 3-42.

パラナ Parana 川の考古学(Francisco de Aparicio);グアラニ Guarani 族(Alfred Metraux);テュピナンバ Tupinamba 族(Alfred Metraux);グアハ Guaja 族(Curt Nimuendaju);テネテハラ Tenetehara 族(Charles Wagley・Eduardo Galvao);アマゾン盆地の考古学(Betty J. Meggers);タピラペ Tapirape 族(Charles Wagley・Eduardo Galvao);カラハ Caraja 族(William Lipkind);テュリワラ Turiwara 族とアルア Arua 族(Curt Nimuendaju);アマナエ Amanaye 族(Curt Nimuendaju・Alfred Metraux);トカンティンス Tocantins 川下流域に居住する殆ど知られていない諸部族(Curt Nimuendaju);アマゾン川下流域に居住する殆ど知られていない諸部族(Curt Nimuendaju);シング Xingu 川中下流域の諸部族(Curt Nimuendaju);マウエ Maue 族とアラピウム Arapium 族(Curt Nimuendaju);ムラ Mura 族とピラハ Piraha 族(Curt Nimuendaju);ムンドゥルク Mundurucu 族(Donald

Horton);カワヒブ Cawahib 族、パリンティンティン Parintintin 族とそれら周辺の諸部族(Curt Nimuendaju);チュピ・カワヒブ (Claude Levi-Strauss);カヤビ Cayabi 族、タパニューナ Tapanyuna 族、アピアカ Apiaca 族(Curt Nimuendaju);ジング Xingu 川上流域の諸部族(Claude Levi-Strauss)

第2部. マト・グロosso Mato Grosso とボリヴィア東部の諸部族 pp. 249-506, pls. 35-47, figs. 43-71.

パレッシ Paressi 族(Alfred Metraux);ナンビキュアラ Nambicuara 族(Claude Levi-Strauss);グアポレ Guapore 川右岸域の諸部族(Claude Levi-Strauss);ボリヴィア東部とマデイラ Madeira 川源流地域の諸部族(Alfred Metraux);スイリオノ Sironio 族(Allan Holmberg);ボリヴィア領域のアンデス山脈東麓の諸部族(Alfred Metraux)

第3部. モンタナ Montana とボリヴィアの東部アンデス地域の諸部族 pp. 507-656. pls. 48-63. figs. 72-93. 地図5-6.

モンタナの諸部族：序論(Julian H. Steward);ペルー、エクアドル領域のモンタナの諸部族(Julian H. Steward・Alfred Metraux)

第4部. アマゾン低地西部の諸部族 pp. 657-798. pls. 64-88. figs. 94-118.

フルア・プルス Jurua-Purs 盆地の諸部族(Alfred Metraux);アマゾン川上中流域の諸部族(Alfred Metraux);トクナ Tucuna 族(Curt Nimuendaju);ペバン Peban 諸部族(Julian H. Steward・Alfred Metraux);トクカノ Tucanoan 西部の諸部族(Julian H. Steward);ウィット Witotoan 諸部族(Julian H. Steward);ウアウペス・カケタ Uaupes-Caqueta 地域の諸部族(Irving Goldman)

第5部. ガイアナ Guianas とアマゾン川北側の支流域の諸部族 pp. 799-881. pls. 105-126. figs. 119-134.

ガイアナの諸部族(John Gillin);リオ・ネグロ Rio Negro 盆地の狩猟採集諸部族(Alfred Metraux);ワルラウ族(Paul Kirchhoff)

第6部. 熱帯雨林地域の文化地域(Julian H. Steward) pp. 883-899, map

8.

用語解説 pp. 901-902.

第3巻の引用文献目録 pp. 903-986.

第4巻(1948). カリブ海沿岸地域の諸部族. 総 XX+609頁., 図面98., 挿図79., 地図11.

前書き (Julian H. Steward) pp. XV-XVII. 地図1.

カリブ海沿岸地域の諸部族：序論 (Julian H. Steward) pp. 1-41.

第1部. 中央アメリカの諸文化 pp. 43-296. pls. 1-60. figs. 1-66. 地図2-5.

中央アメリカの諸文化：序論 (Frederick Johnson) pp. 43-68.. map 2.

中央アメリカの考古学

中央アメリカの考古学：序論 (Wm. Duncan Strong); ホンジュラスの考古学 (Wm. Duncan Strong); コスタリカとニカラグアの考古学 (Wm. Duncan Strong); パナマの考古学 (Samuel K. Lothrop); 中央アメリカの基層諸文化 (Doris Stone)

白人占領後の中央アメリカの民族学

白人占領後の中央アメリカの民族学：序論 (Frederick Johnson); メソアメリカの分割 (Frederick Johnson); 北部高地の諸部族—特にレンカ Lenca 族 (Doris Stone); カリブ低地の諸部族—モスキート Mosquito 族、スモ Sumo 族、パヤ Paya 族、シカケ Jicaque 族 (Paul Kirchhoff); カリブ低地の諸部族—タラマンカ Talamanca の分割 (Frederick Johnson); パナマ運河以西、以南の諸部族 (Samue K. Lothrop); クナ Cuna 族 (David B. Stout); チョコ Choco 族 (David B. Stout); カヤパ Cayapa 族とコロラド Colorado 族 (John Murra); 中央アメリカにおける人類学的必要性和可能性 (Wm. Duncan Strong・Frederick Johnson)

第2部. 南アメリカ大陸北西部の諸文化 pp. 297-493. pls. 61-78. figs. 67-79. 地図6, 7.

カウカ Cauca 峡谷のアンデス以外の諸部族 (Gregorio Hernandez de Alba); コロンビア北部低地の諸部族 (Gregorio Hernan-

dez de Alba);パタンゴロ Patangoro 族とアマニ Amani 族(Paul Kirchhoff);アンデス文化の山脈より北東への延長(Alfred Metraux・Paul Kirchhoff);ゴアヒロ Goajiro 族(John M. Armstrong・Alfred Metraux);グアユペ Guayupe 族とサエ Sae 族(Paul Kirchhoff);ベトイ Betoï 族とその近隣諸部族(Gregorio Hernandez de Alba);アチャグア Achagua 族とその近隣諸部族(Gregorio Hernandez de Alba);ヴェネズエラの考古学(Alfred Kidder II);オトマック Otomac 族(Paul Kirchhoff);ヴェネズエラのヤノス Llanos の食料採集諸部族(Paul Kirchhoff);ヴェネズエラ北西部の諸部族(Gregorio Hernandez de Alba);ヴェネズエラ北部・中部の諸部族(Gregorio Hernandez de Alba);オリノコ Orinoco 川以北の諸部族(Paul Kirchhoff)

第3部. 西インド諸島 pp. 495-564. pls. 79-98. 地図8-11.

西インド諸島：序論(Irving Rouse);キボニー-Ciboney 族(Irving Rouse; Pedro Garcia Valdes による「キボニー族の民族誌」を含む);アラワク Arawak 族(Irving Rouse; Adolfo de Hostos による「プエルト・リコの民族誌」を含む);カリブ Carib 族(Irving Rouse)

第4巻の引用文献目録. pp. 567-609.

第5巻(1949). 南アメリカ大陸先住民族の比較民族学. 総 XXVI+818頁., 図面56., 挿図190., 地図22.

第1部. 南アメリカ大陸先住民族の文化比較概観 pp. 1-643. pls. 1-56. figs. 1-190. 地図1-15.

建築と工学

住居(Wendell C. Bennett);家具(Wendell C. Bennett);宗教建築(Wendell C. Bennett);工学(Wendell C. Bennett)

製作と技術

木の皮から作った布(Alfred Metraux);バスケット(Lila M. O'Neale);織物(Lila M. O'Neale);土器(Gordon R. Willey);冶金(William C. Root);ゴム(Alfred Metraux);武器(Alfred

Metraux);わな(John M. Cooper);魚の毒(Robert F. Heizer);火
起し(John M. Cooper)

社会的・政治的生活

アンデス諸民族の社会・政治組織(Paul Kirchhoff);熱帯雨林と辺
境諸部族の社会・政治組織(Robert. H. Lowie);熱帯雨林と辺境諸
部族の財産(Robert. H. Lowie);擬娩(女性が出産の床にあると
き、夫が床について出産の苦しみをまねたり、食物を制限したり
する風習)(Alfred Metraux);少年の通過(イニシエーション)儀
礼(Alfred Metraux);戦争・食人・人体トロフィー(Alfred
Metraux)

美的行動およびレクリエーション

芸術(A. L. Kroeber);岩壁画(Irving Rouse);ゲームと賭け事
(John M. Cooper);刺激と麻薬(John M. Cooper);宗教とシャーマ
ニズム(Alfred Metraux)

知識と学問

数、長さ、重さ、暦(Wendell C. Bennett);記憶法と記録手段
(Wendell C. Bennett);医療行為(Erwin H. Ackerknecht)

第2部. 南アメリカ大陸におけるイエズス会の布教活動(Alfred
Metraux) pp. 645-653.

第3部. 南アメリカ大陸先住民族の人口(Julian H. Steward) pp.
655-668, 地図16-17.

第4部. 南アメリカ大陸の文化—解釈と概要(Julian H. Steward) pp.
669-772, 地図18-22.

用語解説 pp. 773-782.

第5巻の引用文献目録 pp. 783-818.

第6巻(1950). 南アメリカ大陸先住民族の形質人類学、言語学、文化的地理.
総 XIII+715頁., 図面47., 挿図3., 地図18.

前書き(Julian H. Steward) pp. X-XII.

第1部. 先史時代人 pp. 1-17. pls. 1-4. fig. 1.

南アメリカにおける人類の古さ(Theodore D. McCown);アルゼ

ンチンにおける先史時代人に関する理論の現段階(Joaquin Fren-
guelli)

第2部. 形質人類学 T. Dale Stewart 編集. pp. 19-156. pls. 5-27. figs.
2, 3. 地図1-6.

南アメリカ大陸先住民の人骨資料

南アメリカ大陸先住民の人骨資料の人体測定法(T. Dale Stewart・
Marshall T. Newman);南アメリカ大陸先住民の人骨資料に見る
変形、穿頭、切断(T. Dale Stewart);南アメリカ大陸先住民の人
骨資料の病理的变化(T. Dale Stewart);アルゼンチン先住民の頭
蓋変形(Jose Imbelloni)

現在の南アメリカ大陸先住民

南アメリカ大陸先住民の人体測定法(Morris Steggerda);ブラジ
ル先住民の人体測定法(Jose Bastos d'Avila);南アメリカ大陸先
住民の髪と染髪(Morris Steggerda);南アメリカ大陸先住民の血
縁のグループ分け(William C. Boyd);南アメリカ大陸先住民の基
礎代謝レート(Elsie A. Wilson);南アメリカ大陸の先住民とスペ
イン人との混血(Morris Steggerda);ブラジルの混血のタイプ
(Maria Julia Pourchet)

チリの形質人類学

チリ先住民の人類学(Carlos Henckel);チリの病理の地理学(Er-
nesto Herzog);チリの諸人種の内臓の形質人類学(Carlos Henckel)

第2部の用語解説

第3部. 南アメリカ大陸先住民族の言語(J. Alden Mason) pp. 157-317.

第4部. 地理と動植物資源 pp. 319-543. pls. 28-47. 地図7-17.

南アメリカの地理(Carl O. Sauer);南アメリカの動物相と民族動
物学(Raymond M. Gilmore);南アメリカ熱帯部における野生植
物の利用(Claude Levi-Strauss);南アメリカ・中央アメリカの栽
培植物(Carl O. Sauer)

第6巻の引用文献目録 pp. 545-715.

第7巻(1959). 以上6巻の総索引 総 VI+286頁

17. 『河川流域低地における（ダム建設に先立つ）行政発掘調査の成果集 *Inter-Agency Archeological Salvage Program, River Basin Surveys Papers*』⁽³⁾

このシリーズは、当時アメリカ民族学局局長であったフランク＝ロバートツ Frank H. H. Roberts, Jr.が編集したもので、彼の死後刊行の198号は Robert L. Stephenson 編集である。原文で Inter-Agency（省庁間）とあるのは、この一連の行政発掘が、スミソニアン研究所だけではなく、連邦政府内務省と陸軍工兵隊との共同プロジェクトだからである。

154(1953). *River Basin Surveys Papers*, Nos. 1-6. XV+336 pp., 56 pls., 40 figs.

No. 1. 「ミズーリ峡谷開発計画と先史時代—1948年実施のミズーリ川盆地の考古学踏査の概要報告」Waldo R. Wedel 著. pp. XV-XVIII, 1-59, pls. 1-12.

No. 2. 「ミズーリ峡谷開発計画と先史時代—1949年実施のミズーリ川盆地の考古学踏査の概要報告」Waldo R. Wedel 著. pp. 61-101, pls. 13-15.

No. 3. 「ウッドラフ Woodruff 横穴墓—カンザス州フィリップス郡の先史時代埋葬遺跡」Marvin F. Kivett 著. pp. 103-141, pls. 16-28.

No. 4. 「アディックス Addicks ダム遺跡」その1) 「テキサス州南東部のアディックス・ダム盆地の考古学的踏査」Joe Ben Wheat 著. pp. 143-252, pls. 29-47.; その2) 「テキサス州アディックス貯水池のドーリング Doering・コブズ Kobs 両遺跡出土の先住民人骨」Marshall T. Newman 著. pp. 253-266.

⁽³⁾39LM301や9CK5など、この章で頻出するアメリカ合衆国内での遺跡名のコード化について触れておく。遺跡は「1～50の数字・アルファベット2文字・数字」で表記される。最初の数字は、アラバマ州を筆頭に合衆国50州をアルファベット順に並べ、1から50までうった数字である。ちなみにジョージア州は9、ミシガン州は20、ノース・ダコタ州は32、サウス・ダコタ州は39である。次の2文字は、各州の郡 county 名を略したもので、サウス・ダコタ州ポッター Potter 郡が PO、サウス・ダコタ州ライマン Lyman 郡が LM と表記される。最後の数字は、各郡内で遺跡が発見され、州政府に登録された順にうたれた番号である。

- No. 5. 「ホッジス Hodges 遺跡」その1)「ニュー・メキシコ州トゥクムカリ Tucumcari 付近の2箇所の岩陰遺跡」Herbert W. Dick 著. pp. 267-284, pls. 48-54.; その2)「ニュー・メキシコ州クエイ Quay 郡ホッジス遺跡の地質」Sheldon Judson 著. pp. 285-302.
- No. 6. 「ジョージア州エルバート Elbert 郡レンバート Rembert マウンド群」Joseph R. Caldwell 著. pp. 303-320, pls. 55-56.
- 156(1954). *River Basin Surveys Papers*, No.7. XI+190 pp., 22 pls., 56 figs., 6 maps.
- No. 7. 「サウス・ダコタ州オアヘ Oahe ダム地域の1950-51年実施の考古学的調査」Donald J. Lehmer 著. Theodore E. White・Norton H Nickerson・Ding Hou 作成の付録を含む.
- 166(1957). *River Basin Surveys Papers*, No.8. IX+258 pp., 40 pls., 6 figs., 19 maps.
- No. 8. 「オレゴン州ウマティラ Umatilla 付近のマクナリー-McNary 貯水池盆地における発掘調査」Douglas Osborne 著. MarShall T. Newman・Arthur Woodward・W. J. Kroll・B. H. McLeod 作成の付録含む.
- 169(1958). *River Basin Surveys Papers*, numbers 9-14. IX+392 pp., 73 pls., 13 figs., 9 maps.
- No. 9. 「ノース・ダコタ州ハート・ブッテ Heart Butte 貯水池地域の考古学調査」Paul L. Cooper 著. pp. 1-40, pls. 1-12, maps 1 and 2.
- No. 10. 「カンザス州タトル・クリーク Tuttle Creek ダムの考古学調査」Robert B. Cumming, Jr. pp. 41-78, pls. 13-24, maps 3 and 4.
- No. 11. 「サウス・ダコタ州フォート・ランダール Fort Randall 貯水池の冬季村落スペイン Spain 遺跡(39LM301)」Carlyle S. Smith・Roger T. Grange, Jr. 共著 pp. 79-128, pls. 25-36, maps 5 and 6.
- No. 12. 「ジョージア州ウィルバンクス Wilbanks 遺跡(9CK5)」William H. Sears 著. pp. 129-194, pls. 37-45, map 7.
- No. 13. 「フロリダ州・ジョージア州にまたがるジム・ウッドラフ Jim Woodruff 貯水池とその周辺の歴史時代遺跡」Mark F. Boyd 著.

- pp. 196-314, pls. 46-55, map 8.
- No. 14. 「フロリダ州ジム・ウッドラフ貯水池地域のチャッタフーチー
Chattahoochee 川付近の6箇所の遺跡」 Ripley P. Bullen 著. pp.
315-357, pls. 56-73, map 9.
- 176(1960). *River Basin Surveys Papers, numbers 15-20*, IX+337 pp.,
65 pls., 25 figs., 7 maps.
- No. 15. 「ミズーリ川上流の歴史考古学」 Merrill J. Mattes 著. pp. 1-23.
- No. 16. 「サウス・ダコタ州フォート・ランダール貯水池の歴史時代遺
跡群」 John E. Mills 著. pp. 25-48, pls. 1-9, map 1.
- No. 17. 「サウス・ダコタ州フォート・ランダール貯水池のフォート・
ルックアウト・トレーディング・ポスト Fort Lookout Trading
Post II 遺跡の発掘とその他考古学的調査」 Carl F. Miller 著. pp.
49-82, pls. 10-18, map 2.
- No. 18. 「サウス・ダコタ州オアヘ・ダム地域の歴史時代交易拠点であっ
たフォート・ピエール Fort Pierre II 遺跡(39ST217)」 G. Hubert
Smith 著. pp. 83-158, pls. 19-30, maps 3 and 4.
- No. 19. 「ノース・ダコタ州ガリソン Garrison 貯水池のフォート・ス
ティーヴンソン Fort Stevenson 遺跡(32ML1)の考古学調査」 G.
Hubert Smith 著. Carlyle S. Smith による付録も含む. pp.
159-238, pls. 31-54, maps 5 and 6.
- No. 20. 「ノース・ダコタ州ガリソン貯水池の小規模交易拠点である
キップス・ポスト Kipp's Post 遺跡(32MN1)の考古学」 Alan R.
Woolworth・W. Raymond Wood 共著. pp. 239-305, pls. 55-65,
map 7.
- 179(1961). *River Basin Surveys Papers, numbers 21-24*. XX+337 pp.,
56 pls., 43 figs., 7 maps.
- No. 21. 「テキサス州サルファー-Sulphur 川テキサーカナ Texarkana
貯水池での発掘」 Edward B. Jelks 著. pp. XIII-XVIII+1-78, pls.
1-17.
- No. 22. 「アイオワ州コーラルヴィル Coralville 貯水池での考古学調
査」 Warren W. Caldwell 著. pp. 79-148, pls. 18-29.

- No. 23. 「マクナリー貯水池—高地 Plateau 考古学の一研究」 Joel L. Shiner 著. pp. 149-266, pls. 30-46, maps 1-7.
- No. 24. 「コロンビア川中流域のシープ・アイランド Sheep Island 遺跡」 Douglas Osborne・Alan Bryan・Robert H. Crabtree 共著. pp. 267-306, pls. 45-56.
- 182(1962). *River Basin Surveys Papers*, number 25. XVI+447 pp., 110 pls., 65 figs, 20 maps.
- No. 25. 「ヴァージニア州ノース・キャロライナ州にまたがるロアノケ Roanoke 川のジョン・H・カー John H. Kerr 貯水池盆地の考古学」 Carl F. Miller 著. Lucile E. Hoyme・William M. Bass による、貯水池盆地内のトリフェロ Tollifero 遺跡・クラークスヴィル Clarksville 遺跡出土人骨の報告を含む。
- 185(1963). *River Basin Surveys Papers*, numbers 26-32. XII+344 pp., 57 pls., 43 figs., 5 maps.
- No. 26. 「ガリソン貯水池のフォート・バーソルド先住民居留地とその付近の小規模遺跡」 George Metcalf 著.
- No. 27. 「ノース・ダコタ州マーサー Mercer 郡の歴史時代アリカラ族の防御集落であるスター・ヴィレッジ Star Village 遺跡」 George Metcalf 著.
- No. 28. 「ノース・ダコタ州ガリソン貯水池フォート・バーソルド先住民居留地のサンティー・ボトムズ Santee Bottoms のダンス・ホール」 Donald D. Hartle 著.
- No. 29. 「ノース・ダコタ州ガリソン貯水池の歴史時代ヒダツァ族村落であるクロウ・フライズ・ハイ Crow-Flies-High 遺跡(32MZ1)」 Carling Malouf 著.
- No. 30. 「ジェームズタウン Jamestown 貯水池地域の先住民文化複合であるスタッツマン・フォーカス Stutsman Focus」 R. P. Wheeler 著.
- No. 31. 「モンタナ州タイバー Tiber 貯水池トゥール Toole 郡域の考古学的諸側面」 Carl F. Miller 著.
- No. 32. 「カンザス州ロヴウェル Lovewell 貯水池地域の行政考古学調

- 查」 Robert W. Neuman 著
 189(1964). *River Basin Surveys Papers*, numbers 33-38. XIV+405, pp., 58 pls., 66 figs., 13 maps.
- No. 33. 「ノース・ダコタ州オアヘ Oahe 貯水池地域のポール・ブレイヴ Paul Brave 遺跡(32SI4)」 W. Raymond Wood・Alan R. Woolworth 共著.
- No. 34. 「サウス・ダコタ州オアヘ貯水池地域のデメリー-Demery 遺跡(39CO1)」 Alan R. Woolworth・W. Raymond Wood 共著.
- No. 35. 「サウス・ダコタ州ポッター Potter 郡オアヘ貯水池地域ホスターマン Hosterman 遺跡の1956年実施の考古学調査(39PO7)」 Carl F. Miller 著.
- No. 36. 「サウス・ダコタ州ライマン Lyman 郡ビッグ・ベンド Big Bend 貯水池ヒッケイ・ブロットラーズ Hickey Brottlers 遺跡(39LM4)の考古学調査 Warren W. Caldwell・Lee G. Madison・Bernard Golden 共著.
- No. 37. 「サウス・ダコタ州ライマン郡ビッグ・ベンド貯水池グッド・ソルジャー Good Soldier 遺跡(39LM238)」 Robert W. Neuman 著.
- No. 38. 「カンザス州トロント Toronto 貯水池地域の考古学調査」 James H. Howard 著.
- 198(1967). *River Basin Surveys Papers*, No. 39. XIV+232 pp., 17 figs., 9 pls., 20 maps, 15 tables.
- No. 39. 「マンダン族の文化史の解釈」 W. Raymond Wood 著.

18. 南北両アメリカ以外の地域を扱ったもの

- 38(1909). 『ハワイにおける文字によらない文学—神聖な歌である「フラ」の翻訳・解説』 *Unwritten literature of Hawaii. The sacred songs of the hula collected and translated, with notes, and an account of the hula*, Nathaniel B. Emerson (文学修士・医学博士) 著. 288 pp., 24 pls., 3 figs., 14 musical pieces.

- 151(1953). *AP*, No. 38. 「世界各地の先住民が漁労で使う毒 Aboriginal fish poisons」 Robert F. Heizer 著. pp. 225-283, pls. 16-19, 地図2-4.
- 173(1960). *AP*. No. 60. 「ミクロネシア キャロライン諸島の文字 A Caroline Islands script」 Saul H. Riesenbergs・Shigeru Kaneshiro 共著. pp. 269-333, pls. 42-44.

19. 『アメリカ民族学局紀要』執筆陣の学問的貢献

A. スミソニアン研究所に勤めていた研究者

まず、このシリーズには序文以外寄稿していないが、アメリカ民族学局初代局長ジョン＝パウエル John Wesley Powell(1834-1902)の貢献をここで触れないわけにはいかない。このアメリカ民族学局紀要シリーズの初期の号は基本的にパウエルが企画し、執筆依頼したのだからである。彼は総合人類学者・地質学者・哲学者で、チャールズ＝ダーウィンや『古代社会 *Ancient Society*』を著したルイス＝モルガン Lewis Henry Morgan の影響を強く受けた進化論者であった。とはいえ、局長としてのパウエルは、反進化論者であったフランツ＝ボアズらを重用していることは興味深い。彼自身の人類学に関する原稿の大半は20世紀後半まで活字化されなかったが、メキシコ以北アメリカ先住民諸語の分類体系を、アメリカ民族学局年報第7号(1891), pp. 1-142に *Indian Linguistic Families of America North of Mexico* として、初めて刊行した。北アメリカだけで200の先住民言語(方言を除く)が使われていたといわれており、パウエルはそれを55の語族にまとめた。パウエルによって先鞭をつけられた先住民諸語を分類する研究は後述するアルフレッド＝クロバーやエドワード＝サピアらによって継承された。局長在任中の1902年に死去。

紀要1,5,6,9,13,14,15,16,19号を執筆したジェームズ＝ピリング James Constantine Pilling(1846-95)は、19世紀及びそれ以前のアメリカ先住民族の言語に関する文献、原稿を徹底的に収集した人である。先住民族の言葉の翻訳は勿論のこと、白人宣教師たちの宗教的な刊行物まで採録している。彼の献身的努力をパウエルは高く評価し、現地調査にピリングを何回も帯同している。しかしピリングの本職はアメリカ民族学局と現在も

存続しているアメリカ地質調査所 United States Geological Survey の事務長であった。

紀要3,7,21,52 (共著)、60号の著者ウィリアム=ホームズ William Henry Holmes(1846-1933)は、パウエルの跡を継いで、アメリカ民族学局第2代局長となり、1909年まで局長を勤めた民族学者・考古学者・地質学者である。もともと画家としての才能を買われスミソニアン研究所に採用されたが、パウエルに抜擢され国立博物館の研究員となったのが1882年、1897年には国立博物館の人類学科長となり、1909年のアメリカ民族学局局長辞任後は国立博物館の部長に戻った。カリフォルニアを中心に主として考古学の調査を担当した。以下のサイラス=トーマスとともにマウンドビルダー moundbuilders 研究に貢献し、また新大陸には旧石器文化は存在しないと主張した。その他、カリフォルニア、ネヴァダ、ワシントン州を中心に、先住民族の言語を分類、分布図を作成した。1903年刊行の『合衆国東部の先住民の土器 *Aboriginal pottery of the eastern United States*』(アメリカ民族学局年報第20号)では、土器の微細な文様や形態、胎土、製作技法の違いに初めて注目し、先史土器の地域性を明らかにした。局長在任中に紀要30号『メキシコ以北アメリカ先住民族百科全書 *Handbook of American Indians North of Mexico*』を企画し、第1部の刊行にこぎつけた。百科全書刊行の輝かしい伝統の始まりはホームズ局長に負うところが大きい。

紀要4,8,10,12,18,44号の著者サイラス=トーマス Cyrus Thomas (1825-1910)は、1881年から1883年にかけて当時急速に破壊されつつあったマウンドの調査を局長パウエルより委ねられた。この学術報告が700ページに及ぶ『アメリカ民族学局マウンド調査報告 *Report on the mound explorations of the Bureau of Ethnology*』(年報第12号 [1894])である。当時はアメリカ先住民への差別的意識から、マウンドは彼ら先住民族の祖先たちの文化の所産とは認めず、マウンドビルダーという未知の民族が築造したものという俗説があった。トーマスの調査により、マウンドはアメリカの先住民の祖先たちが残したものであることが明らかとなり、マウンドビルダー説はここに撃沈されることとなった。これがトーマスのアメリカ合衆国人類学における最大の貢献である。実は、トーマスは1882年のア

メロカ民族学局採用以前、昆虫学者として1869年以来アメリカ地質調査所で仕事をしており、さらにそれ以前は弁護士や教会の牧師もしていたことがある。

紀要29, 39, 43, 68, 73, 88, 103, 127, 132, 133(AP, No. 10), 137, 145号の著者ジョン＝スワントン John Reed Swanton(1873-1958)は1905年から44年間、アメリカ民族学局の研究員 research associate として多大な貢献をした。1896年ハーヴァード大学卒業、コロンビア大学でフランツ＝ボアズの下で2年間勉強した後、1900年にハーヴァード大学で博士号取得。人類学で博士号を取得した極初期の(恐らく最初の)研究者のひとりである。アメリカ民族学局の仕事のほかに、アメリカ人類学協会 American Anthropological Association の機関誌 *American Anthropologist* の編集主幹、同協会の会長も務め、日本学士院科学部門に相当するアメリカ国立科学院 National Academy of Sciences の会員にも選出された。大学院生時代は北西海岸の諸部族の研究で名を成したが、スミソニアン研究所奉職以降は特に南東部地域の人類学的研究に記念碑的業績を残した。後に史料民族学 ethnohistory とよばれる、文献史と民族学を合体させた方法論を駆使して、南東部先住民諸部族の理解に絶大な貢献をした。

紀要33, 34, 42, 52, 62, 66巻の著者アレク＝ハードリチカ Aleš Hrdlička(1869-1943)はチェコ＝スロヴァキアのボヘミア生まれの形質人類学者。13歳のときにニュー・ヨークへ移民。ニュー・ヨーク市内のいくつかの医科大学を経て1894年に医師免許取得。1898年から1902年にかけて、ニュー・ヨークのアメリカ自然史博物館の好意で、アメリカ合衆国南西部とメキシコ合衆国の先住民の調査旅行に参加。1903年にスミソニアン研究所人類学科に奉職し、40年間勤めた。新大陸先住民のアジア起源説を強く主張し、また新大陸発見の多くの先史時代人骨が旧石器時代に遡らないことを証明した。そういった人骨が発見されると、それがどこであれ、必ず発見場所を訪れた。スミソニアン研究所での仕事の傍ら、今日まで続く『アメリカン・ジャーナル・オブ・フィジカル・アンソロポロジー *American Journal of Physical Anthropology*』を創刊、またアメリカ形質人類学協会 American Association of Physical Anthropology を創設した。アメリカ国立科学院 National Academy of Sciences の会員にも選出された。

紀要41, 50, 51, 70号の著者ワルター＝フェークス Jesse Walter Fewkes (1850-1930)はハーヴァード大学で学び、博士号取得後、ハーヴァード大学の比較動物学博物館の助手になった。1888年までは海洋動物学を専門にしていたが、同年のカリフォルニアへの研究旅行で民族学に目覚め、翌年からボストン在住の篤志家のお蔭でニュー・メキシコ州アエプロのズニ族の研究を開始した。さらにホピ族の研究も始め、その伝統に関心を持ったことから、考古学へも手を広げた。その過程で、スプリース・トゥリー・ハウスなどメサ・ヴェルデ国立公園内の崖住居の学術的調査を開始、崖住居の保存・修復にも没頭した。1905年にアメリカ民族学局に奉職、1918年に局長に就任した。アメリカ民族学局奉職以降もメサ・ヴェルデ国立公園内の遺跡の調査は継続し、サン・テンブル Sun Temple (太陽神殿) とファイアー・テンブル Fire Temple (火の神殿) といった遺跡を発見した。健康上の理由で1928年に局長を辞した。

紀要45, 53, 61, 75, 80, 86, 90, 93, 102, 110, 124, 161, 165号、さらに『人類学研究論集』No. 27, 28 (紀要136号所収)、No. 36, 37 (紀要151号所収) を執筆したフランシス＝デンスモア Frances Theresa Densmore (1867-1957)はミネソタ州生まれの女性民族音楽学者。オベリン Oberlin 音楽院で学び、1907年以来、スミソニアン研究所の協力員 collaborator (毎年、生活費・旅費込みの研究費 stipend が支給された) として50年間、失われつつある先住民族の音楽の採譜、公開に一生を捧げた。20世紀前半という時代に、独身女性が目的達成のため、当時非常に重く嵩張ったエジソン蓄音機を持って数々の先住民の集落を訪れたことは賞賛に値する。彼女の半生は、自身の言葉で *Smithsonian Annual Report for 1941*, pp. 527-550 に掲載されている。

紀要48, 69, 71, 77, 83号の著者デイヴィッド＝ブッシュネル David Ives Bushnell, Jr. (1875-1941)はミズーリ州生まれの考古学者である。大学・大学院レベルの人類学・考古学の教育は受けてはいないが、アメリカ合衆国東部の先住民族の考古学に大きく貢献した。1901年から1904年までハーヴァード大学ピーボディー博物館の考古学担当助手を務め、その間の研究成果が「ピーボディー人類学博物館研究報告」第3巻第1号『イリノイ州カホキア遺跡とその周辺のマウンド *The Cahokia and Surrounding*

Mound Groups』(1904)として刊行されている。1907年からアメリカ民族学局の協力員となり、1912年から同局のエディターを務めた。紀要原稿の執筆のほか、紀要30号『メキシコ以北アメリカ先住民民族百科全書 *Handbook of American Indians north of Mexico*』の編集に従事、また未発表に終わったが、紀要12号サイラス＝トーマス著『ロッキー山脈以東先史時代工芸のカタログ *Catalogue of prehistoric works east of the Rocky Mountains*』の改訂も行った。

紀要72, 85, 87, 89, 95, 105, 114号と『人類学研究論集』No. 4 (紀要119号所収)、No. 8 (紀要123号所収) を執筆したトルーマン＝マイケルソン Truman Michelson (1879-1938) はニュー・ヨーク州生まれの言語学者・民族学者で、ハーヴァード大学で1904年に博士号を取得後、ドイツのライプツヒヒやボンで勉強を続け、さらにフランツ＝ポアズにも個人的に師事した。1910年にアメリカ民族学局に奉職、死ぬまで研究員を務めた。彼はアルゴンキン語族の分類とフォックス族の民族学において、当時の最高権威者であった。

紀要101, 109号の著者、オマハ族先住民のフランシス＝ラ・フレッシュ Francis La Flesche はアメリカ民族学局の仕事もこなす民族学者・言語学者であり、『オマハ族 *The Omaha Tribe*』(アメリカ民族学局年報第27号)も、ラ・フレッシュの著である。

紀要117, 135, 138号と『人類学研究論集』No. 43 (紀要157号所収)、No. 53 (紀要164号所収)、No. 59 (紀要173号所収)、No. 63 (紀要186号所収)、No. 71, 72, 73 (紀要191号所収) を執筆したマシュー＝スターリング Matthew Williams Stirling (1896-1975) は、1928年から1958年まで30年間アメリカ民族学局の局長を務めた民族学者・考古学者である。彼の局長在任中、アメリカ民族学局紀要は70号を重ね、彼が1938年に創刊した『人類学研究論集』は56号を数えた。『南アメリカ大陸先住民民族百科全書』全7巻を企画、同時に社会人類学研究所 Institute of Social Anthropology を局内に創設、ジュリアン＝スチュワードを双方の総責任者に任命した。また河川流域低地行政発掘調査も開始し、最高責任者にフランク＝ロバーツを任命した。さらに世界恐慌後の失業対策として始められた大規模行政発掘も連邦政府の一機関として責任を持つことになり、特にフロリダ州内

の行政発掘はスターリング自身が陣頭指揮をとった。スターリングはカリフォルニア生まれで、カリフォルニア大学を1920年に卒業、2年間の海軍勤務の後1922年にジョージ=ワシントン大学で修士号を取得した。1943年にはフロリダ州のタンパ大学から名誉理学博士号を授与されている。研究面では、メキシコのヴェラクルス州トレス・サポータス遺跡とタバスコ州ラ・ヴェンタ遺跡の発掘を手がけ、オルメカ文明の始まりが当時考えられていた以上に古い、紀元前1世紀に遡る可能性を指摘した。当時はこの早い年代に疑義を呈する研究者も多かったが、現在は受け入れられている。

紀要92,96,100,111号の著者、121,126号の共著者のフランク=ロバーツ Frank H. H. Roberts, Jr. (1897-1966) はオハイオ州生まれの考古学者・民族学者で、アメリカ合衆国南西部諸文化の権威であった。コロラド州デンヴァー大学で、国語(英語)・歴史学・政治学を学び、1919年に学部を、1921年に大学院修士課程を修了。1927年にハーヴァード大学より人類学で博士号取得。デンヴァー大学講師、コロラド州立博物館学芸員を経て、アメリカ民族学局に1926年奉職。1947年に副局長兼河川流域低地行政発掘調査最高責任者、1958年にアメリカ民族学局最後の局長に就任した。ダム建設で水没する遺跡の調査を指揮し、『河川流域低地における(ダム建設に先立つ)行政発掘調査の成果集』シリーズを編集した。彼は、自分の発掘調査の報告書は自分でまとめるというポリシーを貫いた人であり、同時に南西部地域の考古学的研究成果の統合化にも尽力した。また新大陸への人の移住は、当時巷で言われていたほど新しくなく、むしろ旧石器時代に遡る可能性を信じ、パレオ=インディアン Paleo-Indian 期としての評価が現在確立しているコロラド州リンデンマイヤー-Lindenmeier 遺跡の調査も行った。

紀要116,120,128号や『人類学研究論集』No. 5,6(紀要119号所収)、No. 18(紀要128号所収)、No. 31(紀要136号所収)を執筆し、紀要143号『南アメリカ大陸先住民族百科全書』全7巻の総編集と多数の項目の執筆を行ったジュリアン=スチュワード Julian Haynes Steward (1902-1972) はアメリカ民族学局だけでなく、アメリカ人類学界全体に大きな貢献をした総合人類学者である。彼は1925年に動物学と地質学を専攻してコーネル大学を卒業、1929年にカリフォルニア大学バークレー校から

人類学で博士号を授与された。バークレーでは後述するアルフレッド＝メトロウの弟子筋にあたる。1935年にアメリカ民族学局に奉職、1943年に同局の社会人類学研究所の総責任者となった。その後、1946年から1952年までコロンビア大学の人類学の教授を、1952年から定年の1970年までイリノイ大学の研究教授（教える義務のない）を務めた。スチュワードは20世紀人類学界最高の理論家の一人であり、特に次の2つの側面での貢献は絶大である。ひとつは「文化生態学 cultural ecology」である。社会が有する環境資源、またその環境資源を利用するために社会が保有する技術が、その社会集団が依存する労働形態を決定し、それが社会全体に多大な影響を及ぼすとする立場である。もうひとつは、彼の主著『文化変化の理論 *Theory of Culture Change*』（1955）が示すように、地域・環境によって多様な進化のプロセス、道筋を想定する多系進化論 multilinear evolution である。後述するフランツ＝ポアズの影響で、文化進化論は20世紀初頭以来低調であったが、1950年代以降、ミシガン大学のレズリー＝ホワイト Leslie White と共に、スチュワードは文化進化論をアメリカ人類学界で活発化させた。また彼は発掘調査と民族学的調査も両方、数多くこなし、特にショショーニ族の研究が著名である。本シリーズの百科全書の白眉『南アメリカ大陸先住民族百科全書』のような複雑な内容の本を編集できたのも、彼が考古学・民族学の両方をこなせた、器用な研究者であるからであろう。

紀要134号の著者で、『南アメリカ大陸先住民族百科全書』の編集を補佐、百科全書中の20項目も分担執筆したアルフレッド＝メトロウ Alfred Metraux (1905-1963) はスイス生まれの言語学者・民族学者である。その卓抜した語学能力を駆使して、様々な国の研究機関で仕事をした後、1941年から1945年までアメリカ民族学局の研究員を務めた。南アメリカをフィールドとし、現地調査にたびたび訪れている。アメリカ民族学局辞任後はユネスコに定年まで勤務した。一般向けの著作として *Les Incas. Editions du Seuil*, 1961がある。

紀要112, 130, 153, 174号や『人類学研究論集』No. 45（紀要157号所収）、No. 51（紀要164号所収）、さらに紀要154号『河川流域低地における（ダム建設に先立つ）行政発掘調査の成果集』No. 1, 2を執筆したワルドー＝

ウェデル Waldo R. Wedel(1908-)はカンザス州生まれの考古学者で、スミソニアン研究所国立自然史博物館の考古学担当学芸員を長く務めた研究者である。彼のアメリカ合衆国考古学への貢献は次に2点において大きい。まず直接歴史学的研究方法 direct-historical approach を体系化したこと。これは、先史時代遺跡を残した民族の子孫が判っているとき、その子孫たちの文化を参考にして、そしてその文化が先史時代以来継承されていると仮定して、先史文化を類推復元する研究方法である。この研究方法をネブラスカ州のポーニー族の先史時代理解のために導入した。第2は生態学的研究を考古学に導入したことである。文化は周りの自然環境の影響を受けながら、また自然環境に改変を加えながら変化するという前提に立って、大平原地域の先史文化を理解するために、まず自然環境の復元を試みた。

紀要155号を著し、『南アメリカ大陸先住民族百科全書』の編集を補佐、同百科全書のなかの多数の項目も分担執筆したゴードン=ウィリー Gordon Randolph Willey(1913-2002)は、ハーヴァード大学人類学科のバウディッチ Bowditch 記念メキシコ・中央アメリカ考古学担当荣誉教授として名高い。1950年に37歳の若さで同教授職に就任する以前は、アメリカ民族学局の上級研究員を7年間務めていた。アイオワ州に生まれ、アリゾナ大学で人類学・考古学を学び、学士号、修士号を1935,1936年に取得。1942年にコロンビア大学より人類学で博士号を取得した。アメリカ民族学局奉職以前から、フロリダ州内での世界恐慌以後の失業対策としての行政発掘の現場指揮を担当しており、その報告書である『フロリダ州メキシコ湾岸地域の考古学 *Archaeology of the Florida Gulf Coast*』(Smithsonian Miscellaneous Collections, Vol.113 [1949])は、この地域の編年と地域性を定義づけた成果として以後の研究の基盤となった。成果が紀要155号として結実したペルーのヴィルー峡谷での調査をアメリカ民族学局在任中に実行した。それに先立ち、スチュワードはウィリーに集落研究を担当するよう助言した。このプロジェクトの編年研究の成果は、ニュー・ヨークのアメリカ自然史博物館研究員ジェームズ=フォードと共同で『ペルーヴィルー峡谷の考古学的踏査 *Surface Survey of the Viru Valley, Peru*』Anthropological Papers of the American Museum of Natural History, Vol. 43, Pt.1(1949)として刊行された。ハーヴァード大学着任以降、ウィ

リーはマヤ地域での発掘調査で顕著な業績をあげた。アルター・デ・サク
ラフィシオス Altar de Sacrificios 遺跡の成果は「ピーボディー人類学博
物館研究報告」第62～64巻に、セイバル Seibal 遺跡の成果は同博物館
「メモワール Memoirs」第13～17巻に発表されている。また『アメリカ
考古学の方法と理論 *Method and Theory in American Archaeology*』
(1958)で代表される理論書、『アメリカ考古学概説 *An Introduction to
American Archaeology*』(全2巻,1966-71)といった概説書、『アメリカ
考古学史 *A History of American Archaeology*』(1974,1980,1993; 初版は
小谷凱宣による邦訳 [学生社1979] がある) のような考古学史の本を著し
た。文字通り、戦後のアメリカ合衆国考古学の枠組み構築に大きな役割を
果たした考古学者である。

紀要167号と177号の共著者で、また『南アメリカ大陸先住民族百科全書』
の多くの項目を分担執筆したベティ＝メガーズ Betty J. Meggers(1921-)
は、1952年にコロンビア大学で博士号(人類学)を取得、1950年以来スミ
ソニアン研究所研究員を務めた。ヴェネズエラの遺跡出土の土器と日本の
縄文土器との共通性を主張し、縄文人が太平洋を渡って南米に至ったとい
うあり得ない仮説を発表、日本考古学界では評判が悪い。しかしアメリカ
合衆国では、南アメリカ考古学の最高権威者のひとりとして評価が高い。
また1950年代に既に、アメリカ合衆国考古学の理論的枠組みとして文化進
化論の潜在的重要性を指摘していた点でも、その先見性は注目に値する。

B. スミソニアン研究所以外の研究機関が本務であった研究者

以上のように、アメリカ民族学局紀要の執筆陣は当然のことながらスミ
ソニアン研究所の所員が多いが、ほかの研究機関が本務であった著名な研
究者も数多く執筆に参加している。この節では、たとえ1回きりの執筆で
あっても、アメリカ合衆国人類学に大きな貢献をした研究者を取り上げる。

紀要20,26,27号の執筆と、第40号『アメリカ先住民族諸語百科全書』の
編集を担当したフランツ＝ボアズ Franz Boaz(1858-1942)はドイツ生まれ
の文化人類学者である。1877年のルイス＝モルガン Lewis Henry Mor-
gan による『古代社会 *Ancient Society*』の刊行は、19世紀末に文化進化論
の流行をよんだ。ボアズはその文化進化論を痛烈に批判、個別歴史主義

historical particularism と呼ばれる、個々の地域の細かい実証的研究を推進した。コロンビア大学教授に1896年に就任し、20世紀前半のアメリカ人類学界で絶大な影響力を誇った。したがって、20世紀前半には、文化進化論は早くも廃れ、個別歴史主義が文化人類学界における支配的な理論的枠組みとなった。

紀要57号の著者シルヴァナス＝モーリー＝Sylvanus Griswold Morley (1883-1948) はマヤ研究初期の大家である。1904年にペンシルヴァニア軍事大学を卒業、ハーヴァード大学大学院へ進学し、当時のピーボディー博物館長フレデリック＝パトナム Frederick Ward Putnam の助言でマヤ考古学を志し、1907年に初めてユカタン半島を訪れた。1908年には修士号取得。1915年に首都ワシントンのカーネギー研究所の当時あった考古学部門に奉職、非常な苦勞と危険を冒しながら、未踏の奥地まで足を延ばす。マヤの石碑に刻まれた絵文字を徹底的に採録し、以後の研究の基盤を形成した。特に、摩滅した碑文を解読するのが得意であったという。1946年に刊行されたモーリーによる古典的名著『古代マヤ *The Ancient Maya*』は、死後彼の後進による改訂が続き、最近では1983年にロバート＝シェア Robert J. Sharer による改訂四版が出ている。データは新しくなったとはいえ、このような古い本の枠組みが最近まで活用されたというのは、研究の進展が著しい新大陸考古学では驚くべきことであり、モーリーの研究の方向性がいかに先見性をもっていたかの証拠といえよう。

紀要74号の著者アルフレッド＝トジャー Alfred Marston Tozzer (1877-1954) はハーヴァード大学のメソアメリカ考古学担当の初代教授（ちなみに後任は紀要155号の著者ゴードン＝ウィリー）である。ハーヴァード大学1900年学部卒業、1901年修士号取得、1904年博士号取得。博士論文はマヤ地域の民族学・言語学を扱った内容で、考古学的調査を実践したのは1907年になってからである。1909-10年には、ハーヴァード大学のグアテマラ地域の考古学調査を指揮した。研究者であると同時に、1904年から定年の1948年まで数多くの弟子を育成した。本務機関であるピーボディー人類学博物館からは「研究報告 Papers」第4巻第3号『マヤ古文書における動物の絵画的表現』（1910）、第9巻『マヤ語文法』（1921）などを刊行したが、特に彼の翻訳になるランダ Landa の『ユカタン事物記』

(「研究報告」第18巻 [1941]) は、その詳細を極めた解説が当時の研究の基盤となった。

紀要65号の筆頭筆者アルフレッド＝キダー Alfred Vincent Kidder (1885-1963) は、1908年にハーヴァード大学を卒業、1914年、アメリカ合衆国で初めて北アメリカ考古学を素材に博士論文をハーヴァード大学に提出した研究者である。その内容は、南西部の先史時代土器の分析は文化の発展過程を跡付けるために有効である、ということである。1915年、彼はニュー・メキシコ州ペコス Pecos 遺跡で、南西部で初めて層位的な発掘調査(下の層はより古い、という前提に基づく)を実践した。1921年には母校のピーボディ人類学博物館から「研究報告」第8巻第2号『アリゾナ州北部バスケット・メーカー文化の洞窟遺跡』を共著で刊行した。1929年モーリーの招聘で、カーネギー研究所考古学部門の最高責任者に就任し、カミナルフユ Kaminaljuyu などマヤの大遺跡の調査を開始した。戦前のアメリカ考古学界に絶大な影響力を誇り、1950年に引退した。

紀要78号『カリフォルニア先住民族百科全書』の編者アルフレッド＝クロバー Alfred Kroeber (1876-1960) は、紀要143号『南アメリカ大陸先住民族百科全書』で多数の項目を執筆したロバート＝ローウィ Robert H. Lowie (1883-1957) と共に、ボアズの初期の弟子であり、現在アメリカ合衆国人類学界をリードするカリフォルニア大学バークレー校人類学科の基礎を共に築いた。クロバーはコロンビア大学の学部(1896)、修士課程(1897)では英文学専攻であったが、大学院でボアズの「アメリカ先住民族の言語」の演習に参加、人類学へ転向する。1901年、ボアズの最初の博士課程院生として博士号を取得した。1906年にカリフォルニア大学バークレー校の人類学科に赴任、1919年教授に昇格し、定年の1946年まで務めた。紀要78号が示す通り、彼はカリフォルニアの先住民族の民族学的調査を徹底して行った。特に、ユーロック Yurok 族とモハビ Mohave 族の現地調査は一生続けた。また理論面では、ボアズの個別歴史主義を受け継ぎ、文化生態学や歴史人類学の分野で大きな貢献をした。

ローウィはオーストリアのウィーンで生まれ、1893年に合衆国に移住、1901年にニュー・ヨーク市立大学を卒業、1908年にコロンビア大学より人類学で博士号を授与された。1918年にはクロバーより人類学科専任教員

としてパークレーに招聘され、定年の1950年まで務めた。理論面では『原始社会 *Primitive Society*』を著し、モルガンの社会進化論を痛烈に批判した。

紀要40号『アメリカ先住民族諸語百科全書』第2部「タケルマ」の著者エドワード＝サピア Edward Sapir (1884-1939)は、コロンビア大学でボアズに師事した言語学者・文化人類学者で、文化と言語の関係を明確化したサピア・ウォーフ仮説で著名である。その他、文化の一般理論や文化とパーソナリティ研究に多大な貢献をした。クローバーが1917年に発表した「文化の超有機体説」（文化は個人を超えた独自のものであり、個体の細胞と遺伝子が死んでも文化は残る。すなわち有機体を超えたところに文化はある、という考え方）に反発し、問題にすべきは、個人と文化の関係であり、文化が個人をどう成形してゆくかである、と主張した。またパウエルの研究を継承し、1929年には *Encyclopedia Britanica*, 14版で、200あった北アメリカ先住民の言語を6つの大語族に分類する仮説を提示した。

紀要98号の著者ルース＝ベネディクト Ruth Benedict (1887-1948)は、日本では『菊と刀』の著者として著名である。ボアズの高弟であり、アメリカ合衆国人類学界における「文化とパーソナリティ」学派の筆頭として挙げられる。彼女の博士学位請求論文『北米における守護霊の観念 *The Concept of the Guardian Spirit in North America*』（1923）で、ニュー・メキシコのアプエプロ族の守護霊とトーテミズムとの分布関係を資料を用いて忠実に跡づけた。つまり、彼女にとって日本民族学は余技であって、むしろアプエプロ族の現地調査のほうが彼女の専門である。彼女の名を高らしめたのは、1934年に出版された『文化の諸様式 *Patterns of Culture*』である。このなかで、ニュー・メキシコ州に居住するズニ族と大平原及び北西海岸に居住するクワキツル族の差異を、ニーチェの『悲劇の誕生』を参考にしながら、前者を「アポロ的」、後者を「ディオニソス的」とした。

紀要143号『南アメリカ大陸先住民族百科全書』でいくつかの項目を執筆した著名な研究者に、レヴィ・ストロース Claude Levi-Strauss (1908-)がいる。構造主義を打ち立てた彼がブラジルで現地調査をするようになったいきさは、『悲しき熱帯』において自身の言葉で語られている。彼の業績や学問的・思想的貢献を紹介するまでもないが、レヴィ・ストロース

をも動員して『南アメリカ大陸先住民族百科全書』が完成させられたという現実を特に指摘しておきたい。

紀要184号と『人類学研究論集』No. 32 (紀要136号所収) の著者レスリー＝ホワイト Leslie A. White(1900-1975)は、コロンビア大学で心理学を専攻した後、シカゴ大学で1927年に人類学で博士号を取得した。1930年にミシガン大学人類学科に赴任、定年の1970年まで教授を務めた。ジュリアン＝スチュワードと共に、1950年代に文化進化論の議論をアメリカ人類学界で復活させた功労者である。その主著『文化の進化 *Evolution of Culture*』(1949)において、社会はどの地域・文化であれ同じプロセスで進化したと説いた。これはスチュワードの多系進化論に対し、単系進化論に属する立場である。このような単純極まりないモデルは民族学の分野では1960年代後半以降受け入れられなくなったが、考古学への影響力は大変大きく、1960年代1970年代の、社会進化のプロセスを明らかにすることを研究目的と謳った所謂「プロセス考古学」の理論的基盤となった。ホワイトは理論家として知られたが、紀要184号の内容が示すように、ケレス語を話すプエプロ族の現地調査を徹底して行い、184号のほかに4冊、このテーマの民族誌を刊行した。

『人類学研究論集』No. 22 (紀要133号所収) の著者ジェームズ＝グリフィン James Bennett Griffin(1905-1997)は、シカゴ大学で学部(1927)と修士課程(1930)を修了し、人類学研究科博士課程が当時未設置のミシガン大学で、1936年に人類学で特別に博士号を授与された。1936年にアメリカ考古学会 Society for American Archaeology 設立趣意書に署名した考古学者の一人であった。彼の考古学人生はミシガン大学と共にあって、1946年から1975年まで人類学博物館長を、1949年から定年の1976年まで人類学科教授を、1972年から1975年まで人類学科長を務めた。1984年からはスミソニアン研究所研究員を務め、70年間に亘り合衆国考古学界で指導的な役割を果たし続けた研究者である。特にアメリカ合衆国東部の考古学では、他を寄せ付けない百科事典的知識を誇った。例えば、『ミシシッピ文化期パワーズ文化相のミズーリ州南東部ノッドグラス遺跡 *The Snodgrass Site of the Powers Phase of Southeast Missouri*』(Anthropological Papers, No. 66 [1979])や『イリノイ州ナイト・マウンド群とミシガン州ノート

ン・マウンド群の埋葬 *The Burial Complexes of the Knight and Norton Mounds in Illinois and Michigan*』(Memoirs, No. 2 [1970]) など、ミシガン大学人類学博物館 Museum of Anthropology, University of Michigan から多数の報告書を出したほか、彼が1952年に編集した『アメリカ合衆国東部の考古学 *Archeology of Eastern United States*』は、その緑色の装丁からグリーン・バイブルとよばれ、永く必読文献であった。

『人類学研究論集』No. 79 (紀要196号所収) の著者クライド＝クラックホーン Clyde Kay Maben Kluckhohn(1905-1960) はハーヴァード大学の人類学教授で、真の意味での総合人類学者の最後の人と言われた。永くフィールドワークを行っていたナヴァホ族の民族学は勿論、形質人類学、考古学、言語学においても大きな役割を果たした。本務機関であるピーボディ人類学博物館からは「研究報告 Papers」第22巻第2号『ナヴァホ族の魔術』(1944)、第47巻『文化—その概念と定義の批判的評論』(クローバーとの共著、1952) を刊行した。1928年ウィスコンシン大学卒業、1931年から1932年にウィーン大学に留学、1932年にはローズ Rhodes 奨学金を得てオクスフォード大学に留学、1936年にハーヴァード大学より人類学で博士号取得、直ちにハーヴァード大学人類学科専任教員となり、教授在職中に死去した。アメリカ人類学協会の会長も1947年に務めている。理論家であったと同時に、彼のナヴァホ族研究の成果は、最高の民族誌と評価が高い。また一般向けに書かれた *Mirror for Man*『文化人類学の世界』(講談社現代新書255 [1971]) もこの種の入門書としてやはり最高の評価を受けている。

おわりに

このシリーズの個々の号の内容と執筆者は、1880年代から1960年代にかけてのアメリカ合衆国人類学界を代表するものと考えてよかろう。というより、まさにアメリカ合衆国人類学の学史そのものと言っても過言ではない。大半が報告書であり、研究の基盤としての役割を永く担うものである。基礎研究を重視するアメリカ合衆国学界の姿勢が羨ましい。既に予定していた紙数を大幅に超過したため、19章では個々の研究者紹介に終始

し、彼らがアメリカ合衆国人類学界・考古学界でどのように位置づけられ、どのような弟子を育成したか、どのような影響を与えたか詳述できなかった。一部の研究者、特に考古学者の貢献については、ウィリー・サブロフ共著『アメリカ考古学史』(学生社1979)や、アメリカ考古学史を重点的に議論した拙稿(1990,2005)などを参考にして頂ければ幸いである。なおこのシリーズのほかに、本学にはアメリカ民族学局年報 Annual Report シリーズやイエール大学人類学研究報告 Yale Publications in Anthropology も揃っており、今後も紹介を続け、蔵書のより一層の有効活用を図りたい。

参考文献 (アルファベット順)

- 青木晴夫1979『アメリカ・インディアン』講談社現代新書543
綾部恒雄(編)1984『文化人類学15の理論』中公新書741
Barnard, Alan and Jonathan Spencer (Editors) 1996 *Encyclopedia of Social and Cultural Anthropology*. Routledge, New York.
Evans, Susan Toby and David L. Webster (Editors) 2001 *Archaeology of Ancient Mexico and Central America: An Encyclopedia*. Garland Publishing, New York.
Goddard, Ives (Volume Editor) 1996 *Handbook of North American Indians*, Vol. 17 (Languages). Smithsonian Institution, Washington, D.C.
Johnson, Michael 1999 *Macmillan Encyclopedia of Native American Tribes*. Macmillan Library Reference U.S.A., New York.
Mann, Thomas L. 1988 *Biographical Directory of Anthropologists Born Before 1920*. Garland Publishing, New York and London.
佐々木憲一1990「アメリカ考古学と日本考古学」『考古学研究』第37巻第3号, pp. 25-44
〃2005「アメリカ考古学」安齋正人(編)『現代考古学事典』pp. 1-8. 同成社
Waldman, Carl 2006 *Encyclopedia of Native American Tribes*, Third

- Edition. Checkmark Books, New York.
- Wiley, Gordon R. and Jeremy A. Sabloff 1993 *A History of American Archaeology*, 3rd Edition. W. H. Freeman, New York.
- Winters, Christopher 1991 *International Dictionary of Anthropologists*. Garland Publishing, New York and London.

謝辞

スミソニアン研究所『アメリカ民族学局紀要』と、同時に図書館に入った『アメリカ民族学局年報』については、各巻の著者名、タイトル等、すべての英文出版データを、内田仁君（当時は明治大学考古学博物館嘱託、現在は加藤建設埋蔵文化財担当社員）に入力してもらった。本稿作成のために適切な参考書は、ハーヴァード大学トズアーTozzer人類学図書館参考書担当司書グレゴリー＝フィネガン Gregory A. Finnegan 博士にいろいろご助言いただいた。さらに文献複写にあたっては、トズアー人類学図書館貸し出し担当のジーン＝デ・ヴィタ Gine DeVita 氏のご高配を得た。メソアメリカ地域の固有名詞の発音については、『ピーボディ博物館人類学研究報告』原稿準備に引き続き、早稲田大学の寺崎秀一郎先生にご教示いただいた。南アメリカの固有名詞の発音は、アルゼンチンからの留学生で文学研究科史学専攻（考古学専修）博士後期課程の Ximena M. Romer 女史にご助力いただいた。図は文学部4年生高橋透君に製図してもらった。本稿の民族学・文化人類学に関する部分は、本学政治経済学部教授山内健治氏と同博士後期課程院生中田耕平君に校閲して頂いた。以上の方々に深甚なる謝意を表する。